



研究奨励事業
研究報告

日本の探偵小説・推理小説と中国
——その中国における受容と意味

共同研究

王 林 王 李 王
中 志 志 菁 志
忱 松 松 濤 成

北九州市立

松本清張記念館

目次

中国における日本探偵・推理小説の受容とその意味

王成 2

中国における日本女性推理小説の翻訳と紹介

林濤 13

平林初之輔の探偵小説論

王志松 23

高度成長期における松本清張の社会派推理小説
——『黒い画集』を中心に

李菁 34

中国における日本の探偵・推理小説翻訳作品目録

王中忱 45

中国における日本探偵・推理小説の受容とその意味

首都師範大学外国語学院 王成

一

二十世紀の中国では最初の二十年間と最後の二十年間が探偵小説が広く読まれた時代である。その間は、戦乱や政治イデオロギーの影響で探偵小説が下火になったり、乃至姿を消した時期である。この前後二回の探偵（推理）小説のブームともいえる時期に、外国の探偵小説の翻訳ものがその主役を果たした。日本の探偵小説も黒岩涙香、江戸川乱歩などの探偵小説から、松本清張や森村誠一らの推理小説を経て、最近のミステリー作家の作品まで、幅広く翻訳され、受容された。特に、一九八〇年代から一九九〇年代にかけて、中国において日本の推理小説ブームを起こした。一九七八年～二〇〇四年の出版統計を見ると、日本の探偵・推理小説は膨大な数字に上った。中国で翻訳された作家を作品数の上位一〇人にして、森村誠一（二〇七点）、江戸川乱歩（二〇〇点）、横溝正史（五九点）、松本清張（五八点）、赤川次郎（五一点）、西村京太郎（四〇点）、夏樹静子（三二点）、西村寿行（二二点）、内田康夫（二二点）、水上勉（八点）、とあげられる。しかし、純文学に較べて、ミステリーが多く翻訳されているわりに、研究は立ち遅れている。数多く翻訳された日本のミステリーは中国の日本文学の受容史上、どのような意味を持っているのか。まず、基礎文献の整理から始めて、中国に翻訳された日本ミステリー文学の目録を作成す

べきである。それから、作家別またはテーマ別に日本ミステリー文学の受容史を研究すべきである。また、日本のミステリー小説は中国の読者にどのように読まれてきたか。いわゆる大衆文学としての探偵小説はなぜ中国の読者に愛読されているか。高度成長期に盛んに読まれた日本の推理小説は今まさに高度成長に突入している中国の読者にとって、どんな意味を持っているか。さらに、中国のミステリー小説の再出発は一九八〇年代である。中国の現代作家は日本のミステリー小説を含めて世界のミステリー小説から多くのものを学んだと言われている。その影響関係はどうなっているのか、明らかにすべき問題は多い。中国における日本ミステリー文学の受容をめぐって、幾多の課題が横たわっている。本論は江戸川乱歩や松本清張を中心にして、中国における日本の探偵・推理小説の受容とその意味を考察してみたい。

二

日本のミステリーといえば、その創立者である江戸川乱歩を避けては通れないであろう。最初に、中国における乱歩ミステリーの翻訳を中心にして、その受容の問題を検討してみたい。一九九〇年代から江戸川乱歩のミステリーは中国大陸でもっとも多く翻訳された。中国各地の出版社が競って乱歩ミステリーを出版する現象さえ起きた。北京の群衆出版社、済南の山東文芸出版社、合肥の安徽文芸出版社、上海の少年文芸出版社、成都の四川少年儿童出版社、珠海の珠海出版社など、数多くの出版社が乱歩の本を出版したのである。出版社の地域分布地図だけ見ても、一九八〇年のハルピンの黒竜江人民出版社や台湾の

文経出版社を含めれば、乱歩ミステリーが中国の全土で流通しているといえる。

また、幾種類もの「乱歩探偵シリーズ」が少年、青年、一般という読者層別に、翻訳・出版されている。例えば、少年読者をターゲットとした「少年大偵探叢書」は上海少年儿童出版社から出された乱歩少年探偵ものシリーズである。珠海出版社が出した「乱歩探偵作品集」（十九卷）は一九九〇年六月から二〇〇

〇一年十一月にかけて三回も装丁をかえて版を重ねた。中国国家図書館の所蔵目録で見ると、一九三二版の『蜘蛛男』から今日まで再版ものも含めて乱歩ミステリーの中国語翻訳は百二十冊あまりも所蔵されている。それに、インターネットが普及している時代、多くの読者はインターネットを通じて、乱歩ミステリーを讀書している。Google の検索ツールをかけてみると、日本の探偵小説に関する中国語のホーム・ページが約三七五〇〇件あるが、その中で乱歩ミステリーに関連する中国語のホーム・ページが七〇九〇件検索できる。それを通じてわれわれは中国の探偵小説の愛好者がモダン都市を描いた乱歩ミステリーの世界に引き付けられていることを垣間見ることが出来る。

この流れの中で、『蜘蛛男』がもつとも注目に値する。一九三一年に翻訳された『蜘蛛男』は中国においてもっとも早く翻訳された乱歩ミステリーである。それは二十世紀前半の中国における乱歩ミステリーの特徴を表している。二十世紀後半、『蜘蛛男』は二回も翻訳され、乱歩ミステリーの代表作として読まれている。一九九九年八月『蜘蛛男』は『蜘蛛人』（顧培軍訳）というタイトルで群衆出版社からシリーズ「日本推理小説文庫」の一冊として出版された。二〇〇一年一月、同じ『蜘蛛人』（王亥訳）というタイトルでシリーズ「乱歩サスペンス・ミステリー小説集」の一冊として珠海出版社から出版された。

このように、二十世紀前半の二、三十年代と後半の八、九十年代という二回見られる乱歩ミステリーの受容は都市化と探偵小説の関係を物語っている。中国における乱歩ミステリーの受容はちょうど市場経済が出現し、また再興した時期と一致している。市場経済によって都市化も著しく発展をとげ、都市を中心とした読者大衆が登場したのである。その中で、探偵小説は大衆文学として、文化の消費者といわれる大衆に読まれたのである。日本における乱歩の登場とその成功に示されているように、都市は探偵小説をつくる空間を提供するだけでなく、読者大衆を生み出す空間でもある。本論では『蜘蛛男』の中国語訳を取り上げて、都市と探偵小説の関係を踏まえたうえで、異文化圏の読者の角度から、乱歩ミステリーがどのように中国の読者に読まれたか、とその受容のありかたを考えてみたいと思う。

長い間、普通の中国人にとって日常的に連想できるモダン都市は上海であった。“Modern” という言葉は上海で「摩登」と翻訳されたのである。ある意味では、中国人にとって近代の上海イコール“Modern”である。特に、十九世紀末から二十世紀の前半まで、植民地の上海は世界経済のサイクルに組み込まれたから、経済が大きな成長を持続していた。第一次世界大戦後、上海は、軽工業と貿易を中心に急激に発展して、ニューヨークやロンドン、またパリなどとならぶような世界的大都会となった。経済の発展に後押しされて都市の規模も拡大し、町も変貌を遂げた。上海にあこがれて移民する人が増えたので、上海の人口は激増した。

このモダン都市上海は東京など他の近代都市と通じる側面を数多く持つて

いた。モダンな建物が林立して、電車や自動車为代表する交通機関が整備されつつあった。カフェやダンスホールにモダンガールやモダンボーイが集まった。映画が娯楽のメインとなって、娯楽雑誌も多くの読者層を獲得した。都市人口の拡大によって、文化産業に大きな市場が出現し、出版社、新聞社、雑誌社、書店などが増え、都市住民を読者層にする大衆文学が花を咲かせた。こうして、一九二〇年代の上海は「モダン」と「大衆」の時代を迎えて、中国におけるモダン最前線となったのである。

この時代の中国で、大衆読者向けの「通俗文学」の一翼をなしたのは探偵小説であった。一九三二年十二月、魯迅は自分の読書経験を述べた文章の中で、最初に中国で翻訳された探偵小説を読んだ記憶を次のように書いた。

私たちはかつて梁啓超の創刊した『時務報』に『ホームズ探偵物語』（原文は「福爾摩斯包探案」）の変幻を見、また『新小説』にジュール・ヴェルヌ（Jules Verne）作の科学小説と称する「海底旅行」の類の新奇を見た¹。

この文章で触れられた『ホームズ探偵物語』は、一八九六年に『時務報』の第六冊（一八九六年九月二十七日）から第九冊（一八九六年十月二十七日）まで四回にわたって掲載されたものである。この翻訳小説は中国における最初の翻訳探偵小説である。以降、数々のホームズ探偵物語が多くの翻訳家に翻訳されて、探偵小説のブームを引き起こした。たとえば、一九一六年五月、上海の中華書局から『ホームズ探偵全集』が翻訳、出版された。この探偵小説集は十二冊あり、文言（書き言葉）体で翻訳され、四十四の作品を収録している。一

九三七年までに二十版も出版された。一九二七年、上海で設立されたばかりの世界書局という出版社は、その競争力を高めるために、読者の間で広く読まれていたホームズ探偵物語を言文一致の文体で新たに翻訳した『ホームズ探偵大全集』を、一九三〇年までかけて全部出版した。こうして、ホームズ探偵物語は十九世紀末から今日まで中国の読者に愛読され続けた。翻訳小説が盛んになった一九一〇年代、中国において探偵小説の翻訳が大半を占めていたと言われている。文学史家の阿英は『翻訳史話』のなかで、次のように探偵小説の流行を語った。

翻訳小説が中国に輸入された初期、実際に二つの主流を成した。その主流は東西の文学を代表するのには足りないが、資本主義の台頭や民族革命の潮流と共に出現した探偵小説や虚無党小説である。本当にすぐれた文学作品はたいていこのような小説の流行に飲み込まれた²。

この文章を読むと、文学史家は探偵小説が二十世紀の中国において、一番多く翻訳され、よく読まれたことは認めても、その文学性はあまり評価していないことがわかる。「資本主義の台頭や民族革命の潮流と共に出現した」探偵小説の流行は、当時の中国社会の現状、読者の読書趣味、翻訳者の嗜好などから、その原因として考えられる。

「科学」と「民主」が「新文化運動」のスローガンとして掲げられた一九一〇年代に、翻訳家たちは探偵小説の中に、その精神を見出した。探偵小説は人権を守るために、科学的な実証によって犯人を見つけ出し、法律に基づいて犯

人を裁くというように展開した物語が多い。また、「勸善懲悪」の精神や論理に満ちた物語の展開をもった探偵小説は当時の中国において、インテリから一般の市民まで、広く愛読されたのである。外国の探偵小説が大量に翻訳紹介されるにつれて、市民大衆向けの所謂「通俗文学」雑誌に、翻訳探偵小説や創作探偵小説の掲載も増えた。

たとえば、一九一〇年代の上海を根拠地とした文芸雑誌「礼拝六」（一九一四年創刊）があげられる。アメリカの雑誌「Saturday Evening Post」に倣って毎週土曜日に発行されたこの週刊誌は、主に恋愛小説や探偵小説を掲載して、都市の大衆読者の間で広く読まれた。大衆向けの「通俗文学」の雑誌や余暇雑誌は探偵小説欄を設けたり探偵小説号を出した。『小説世界』（一九二三年一月～一九二九年十二月）はそのような大衆向けの文学雑誌である。その探偵小説号（一九二四年十二月）は外国の探偵小説の翻訳や中国の探偵作家の作品を掲載したものである。また、一九二三年六月に創刊された探偵小説の専門誌『偵探世界』は多くの読者や多くの書き手に支えられたから、持続できたのである。

こうした流れの中で、中国語に翻訳された日本の探偵小説として黒岩涙香の探偵小説と乱歩の『蜘蛛男』が注目される。一九三二年八月に『蜘蛛男』を出版したのは南京太平街にある南京書店である。『蜘蛛男』は全三五一頁で、値段が「大洋捌角」（銀貨八十銭）である。単行本の著作権頁に「分售処 各省各大書局」と記されているように、各省の大手本屋に卸していたので、中国全土に流通したと考えられる。「通俗小説」といわれる大衆小説流行の基盤があるから、「日本奇情偵探小説」という角書きを冠した『蜘蛛男』は読者の注目

を引いたと考えられる。

それでは、なぜ『蜘蛛男』はこの時期に翻訳されたのだろうか。まず、『蜘蛛男』は日本において乱歩の「通俗長編」の人氣が上昇した時期に翻訳されたのである。『蜘蛛男』は一九二九年八月から翌年の六月まで、『講談倶楽部』に連載された長編小説である。一九三〇年十月講談社から『評判小説 蜘蛛男』という標題で単行本として出版された。乱歩自身が「講談社ものを書きつづけているうちに、私は従来にない虚名を博するに至った。純粹の探偵読者やインテリ読者には見はなされたが、ともかく全国的に筆名を知られるようになった」^③と言うように、『蜘蛛男』によって全国的に文名が挙げたのである。

そして、『蜘蛛男』はモダン都市と大衆読者との接点を巧みにつけた探偵小説として、サスペンスや怪奇を融合した物語性と、分かりやすく、歯切れのよい文体で、日本の読者だけでなく、中国の読者にも愛読されたのである。それに、当時の南京や上海や天津をはじめとして、半植民地の特徴を持った中国の大都会は近代化の波に乗って、都市が大きな発展を遂げ、住民たちの意識も近代化するようになった。探偵小説を含めた上海の通俗文学が流行したのは、モダン都市の生活や文化にあこがれる地方の読者が、乱歩の「通俗長編」のような探偵小説を愛読したためと考えられる。

この『蜘蛛男』の翻訳者の黄宏鏞は、著名な翻訳家ではないことはハッキリしている。『蜘蛛男』のほかに、日本文学作品の翻訳が見られないからである。筆者が見つけた資料^④によると、一九二五年三月に台湾の私立淡江中学を卒業した人物だと分かる。翻訳者の素性は特定できないが、一人の日本語の分かる中国人読者であるのはまちがいない。翻訳者としての読みは翻訳された中

国語テキストに如実に表れているはずだ。

『蜘蛛男』の新しさは自動車を利用した犯罪を物語にしたところである。小説に描かれた最初の殺人事件では美術商に偽装した「蜘蛛男」はタクシーを利用して里見芳枝を誘拐し、殺した。第二の殺人事件も犯罪学者畔柳博士に化けた「蜘蛛男」が自家用車を使って、里見絹枝を誘拐し殺害したのである。そして、死体は自動車で東京から遠く離れた江の島の水族館に運ばれた。また、「蜘蛛男」が映画女優の富士洋子を映画撮影の現場から誘拐しようとした時に、あるいは、映画のロケーションの時にも、自動車が使われた。さらに、明智小五郎に見破られた「蜘蛛男」の逃走の際、「蜘蛛男」を乗せた自動車と明智を乗せた警察の車とがカーチェイスを繰り広げた。自家用車とタクシーによる犯罪は探偵小説に時間的にも空間的にも新奇さを提供した。自動車はモダン都市のしるしとして当時の文学作品に頻繁に登場するようになった。「速度の時代へ、機械の時代へ」^⑤といわれるモダン時代に、自動車と犯罪が作家の注目を集めたからである。

自動車は中国の大衆にとっても、富と権力の象徴であった。当時の新聞や雑誌などは繰り返し自動車の広告を掲載し、読者の欲望を煽っていた。上海に限って見ても、一九二二年から一九三一年までの間に自家用自動車が一九八六台から四九五一台に増えた^⑥。新感覚派画家郭建英の漫画「摩登 Juliet」のセリフに「邸宅の前でギターを弾いても、決して顔を出してあなたを見るお嬢さんは一人もいない。それに対して、玄関前を通る自動車のゴォーゴォーという音が聞こえれば、彼女たちは決まってすぐ身を乗り出すのだ。」^⑦とあるように、自

動車はモダン上海のプチブルジョアのあこがれの的であった。

『蜘蛛男』の中に描かれたタクシーは中国でもモダン都市のシンボルである。一九〇八年、米国人が経営するデパートが四川路九十七号にタクシー部門を設けて、買い物に来る顧客のためにサービスを始めた。これが上海におけるタクシーサービスの始まりである。タクシー業界は一九二〇年代から大きな発展を遂げ、一九三五年には、上海にはタクシー会社が一〇七社あり、車は一〇〇三台あった^⑧。日本語では外来語で「タクシー」と言われるが、『蜘蛛男』の中国語訳のテキストでは「野鷄汽車」と翻訳されている。今では、タクシーは中国語で「出租汽车」というが、「野鷄汽車」の言葉のイメージから、「雉」のように街角をさまよう様子が想像できる。ちなみに、当時、東京のタクシーの運転マナーが問題になっていて、交通ルールを守らないタクシーが批判の対象となっていたと言われている^⑨。「タクシー」は上海と東京に出現した近代的な交通機関である。都市生活に浸透するとともに、タクシーによる犯罪も現れるようになった。

このように、『蜘蛛男』によって自動車と文学との関係に新たな可能性が示され、読者はその『蜘蛛男』に描かれた自動車による探偵物語を楽しんだのであろう。

ところで、『蜘蛛男』のなかで、殺人魔の蜘蛛男が人気映画女優の富士洋子を誘拐しようとしたキッカケは映画雑誌に掲載された洋子のグラビアであった。素人探偵畔柳博士の助手をつとめた野崎三郎が映画に関する情報を提供して、博士が推理し、蜘蛛男を捕まえる計画をたてたが、映画館ではスクリーンに映された洋子の顔から血が流れて、映画を見ている洋子が失神し、場内は大

騒ぎとなった。そして、〇町の森でのロケーションでは、蜘蛛男は映画俳優に化けて、警備の網の目を破って撮影中の洋子を攫い出そうとした。さらに、厳重な警備の中、K撮影所での洋子の映画撮影も蜘蛛男のトリックで洋子が麻酔をかけられ、誘拐されそうになった。結局、撮影所長宅の二階の部屋から洋子は連れ出されてしまう。一連の誘拐劇は映画製作の現場で起きたのである。小説によって読者は映画館での経験呼びさまされるだけでなく、映画製作の現場まで覗くことができる。当時の読者はサスペンスの面白さだけでなく、映画に抱いた好奇心をも満足させられたのである。

『蜘蛛男』の中で一番中国語に訳しやすいのは映画をトリックに使ったところであろう。中国語訳のテキストを一読して、翻訳者の映画に詳しいことがわかる。中国語でも、映画に関する表現が豊かになったおかげだともいえよう。当時、「電影」(映画)、「銀幕」(スクリーン)、導演(監督)、演員(俳優)などの中国語が定着し、映画から翻案した探偵小説も流行っていた。映画が作家に新しい技法をもたらして、小説の中にも映画に関する描写が流行りだしたのである。「看电影」(映画を見る)という言葉は「摩登」なスローガンとなった⁽¹¹⁾。映画は一九二〇年代後半から一九三〇年代半ばまで上海市民の娯楽の第一位を占めるようになった。この間、映画館は急速に増加した。一流映画館は光陸(Capitol)、大光明(Grand)、南京(Nanking)、新光(Strand)、蘭心(Lyceum)、国泰(Cathay)などが数えられる。二流以下の映画館は五年間に新たに十数軒建設された。一九二〇年代には上海の映画館は三十数軒にまでなった⁽¹²⁾。文学史家の鄭振鐸がこの時代の上海市民と映画について、次のような文章を残している。

ここ二、三年来、映画は俄かに上海市民のもっとも好む娯楽となった。だから、映画館も日に日に増えている。このような映画館の中で規則と秩序がよく維持され、清潔さと静かさも十分に意識されている。これは好ましいことである。このように映画館は上海の市民に慣れない集団生活と娯楽の規則を経験させることができる⁽¹³⁾。

大衆読者にとって、映画をみることは娯楽であるとともに、モダン時代の西洋文明の雰囲気味わうことでもあったのである。モダン東京の映画撮影の場面を描いたミステリーとして『蜘蛛男』は異文化圏の読者の目を引き付けたにちがいない。

都市化が進展している中、中国の読者はモダン都市とサスペンスを融合した乱歩ミステリーにリアリティを感じたのであろう。また、翻訳探偵小説が育てた分厚い読者層によって乱歩ミステリーが中国でも愛読されたと考えられる。しかし、日本文化の中で生まれた乱歩ミステリーは中国の読者には理解しにくいところも多かった。それにもかかわらず、モダン都市上海の存在は、東京と相似する都市空間として読者に想像の空間をもたらした。たとえ、東京の都市空間をまったく知らなくとも、上海のような都市空間を通して連想できたのであろう。文化の差異のおかげで、「誤読」と「誤訳」はなくならないが、その一方では読者の想像力を発達させるのである。

一九八〇年代の後半から、中国は市場経済の時代に突入した。経済成長の波が押し寄せているなか、中国の都市化はすさまじい速度で進められている。一

九七八年から一九九八年までに、都市の数は一九三から六六八に増え、鎮(町)は二一七三から一八八〇〇まで増えた。都市の総人口は一・七億から三・八億に増えた。人口の都市化率は一七・九%から三〇・四%に上昇した⁽¹³⁾。上海は一九九〇年代の十年間に高層ビルを二〇〇〇棟建設したといわれている⁽¹⁴⁾。都市が欧米風の建築に様変わりし、中流以上の市民が市内や郊外に作られた新興住宅に引越し、「モダン」または「ポスト・モダン」が日常となった。文学、映画、テレビなどのマス・メディアでは一九二〇、三〇年代の都市を題材とするものが氾濫している。「老上海」(「オールド・シヤンハイ」)もメディアを通じて、市民大衆に消費されている。中国社会では一九三〇年代のような「モダン時代」への回帰現象がおこっている。一方、市場経済の時代に、政治と文学を主流とした中国の文学は大衆の趣味に應えられなくなった。政治イデオロギ―に縛られてきた文学観は市場経済の波にさらされ無力感を見せている。今までは通俗文学を軽んじてきた学者も大量に流通している通俗文学(探偵小説)に目を向けるようになった。学界では大衆文化(通俗文化)をめぐる議論も増えて、いわゆる娯楽性と文学性を融合させた「通俗文学」が重視されるようになった。このように、中国において市民社会の再建が進められる時代を背景として外国の探偵小説の受容の問題を見る時、なぜ乱歩ミステリーが中国で広く読まれるようになったか、がわかってくる。

この流れの中で、『蜘蛛男』がもう一度注目されている。一九九九年八月、『蜘蛛男』は『蜘蛛人』(顧培軍訳)というタイトルで群衆出版社からシリーズ「日本推理小説文庫」の一冊として出版された。二〇〇一年一月、同じ『蜘蛛人』(王亥訳)というタイトルでシリーズ「乱歩サスペンス・ミステリー小説集」

の一冊として今度は珠海出版社から出版された。このように、ほぼ同じ時期に異なった出版社から刊行された『蜘蛛男』は、中国における乱歩ミステリー受容のありさまを物語っている。

群衆出版社は戦前の群衆書店から中華人民共和国の警察文化を育んだ大手出版社へと発展した。それは「改革開放」の初期に、松本清張をはじめとした日本の社会派小説を出版した探偵・推理小説の「老舗」である。それに対して、「改革開放」の最前線にある珠海出版社は、市場経済の波に棹さして文化市場を開拓する目的で「乱歩サスペンス・ミステリー小説集」を企画したのである。探偵小説を出版することは、かつての群衆出版社にとっては、警察文化を育てると同時に文学の大衆化を宣伝する目的があった。それに対して、珠海出版社は市民大衆の需要があるから探偵小説を出版するのである。つまり、市場経済の時代に読者大衆は探偵小説の消費者として見直されるようになった。

人間の欲望を最大限に掻き立てる市場経済原理にマッチしている乱歩ミステリーは異文化圏の読者にも好まれる要素を持っている。推理ゲーム、恋愛、性の倒錯、殺人、サスペンス、アクションなど、大衆読者の欲望を掻き立てる通俗文学のさまざまな要素が、モダン都市の風俗が織り込まれた『蜘蛛男』のような乱歩ミステリーから多く読みとれるのである。中国における乱歩ミステリーの受容に関して何よりも重要なのは中国の市場経済と都市化現象なのである。

中国において高く評価されている日本の探偵・推理小説は松本清張をはじめとする社会派推理小説である。今まで、よく知られている作家は森村誠一、水上勉、西村京太郎、夏樹静子、西村寿行である。彼らの作品が中国の読者に評価される根本の理由は社会批判を貫くからである。一九八〇年代、長い間に社会主義リアリズムに慣らされていた中国の読者は、日本の推理小説の芸術性より、「社会派推理小説」というレッテルに注目していた。「日本現代リアリズム作家松本清張」⁽¹⁵⁾は中国における松本清張文学の位置づけだと思われていた。

実は、中国における松本清張の紹介は一九六五年に翻訳、出版された『日本の黒い霧』（文潔若訳、作家出版社）がその始まりだと思われる。文化大革命勃発の前年に反米的なこの作品が紹介されたのは、やはり当時のイデオロギーに合っていたからである。一九六六年の文化大革命以降、西側との文化交流はほとんど途絶え、外国文学はソ連の革命リアリズムしか許されなかったため、清張文学の全貌の紹介はまだ無理だった。

一九七八年、中国は文化大革命以来の鎖国状態を改めて、「改革開放」の政策をとった。文化上の飢餓状態に陥っていた読者は新鮮な外国文化を食るようになり吸収した。日本文学の紹介も再開され、そのなかで『点と線』も紹介された。『点と線』を出版したのは警察官むけの出版物を出す群衆出版社である。それは警察官の「参考書」として刊行、市販されたが、一般の読者にも広く読まれた。後に、汚職した官僚が罪を隠すために殺人事件を起こした『点と線』は世界推理小説ベストテン入りの小説と銘打って、中国の読者の間でさらに愛読されている。

一九八〇年代には清張の推理小説は中国全域において三〇社を超える出版

社から、『点と線』、『砂の器』、『ゼロの焦点』、『歪んだ複写』、『眼の壁』など約四〇編もの長編小説が出版された。文芸雑誌にも清張の短編小説を多く掲載された。外国文学の読者がまだ少ないこの時代に、清張の推理小説がもてはやされたのである。

たとえば、『歪んだ複写』⁽¹⁶⁾は初版で十八万部を刷った。この時期、中国の出版界も復興と発展を迎え、多くの清張ファンをあてこんで次々と作品が紹介された。清張小説の中国での流行と共に、推理小説という概念もよく知られるようになった。その時代の中国の読者にとって松本清張の小説イコール推理小説だったのである。中国の国語辞典である『辞海』では次のように解釈している。

「推理小説…もともと「探偵小説」という。一九四六年日本の推理小説作家木高太郎が探偵小説の論理性や推理性を強めるために、それを推理小説と改称したが、文壇の反応が冷淡だった。日本が文字の改革を実行する時、「偵」を廃止したために、推理小説が広く使われるようになった。」⁽¹⁷⁾

この国語辞書の解釈は推理小説という概念もつよい日本のイメージを持っていたことを物語っている。

なぜ、松本清張の小説がそれほどに中国の読者に愛読されたか。

まず、考えられるのは清張小説が面白いからである。一九八三年五月に中国を訪問した際に、清張は「文学は面白いことが第一。説教調のものでは読者に倦きられる」⁽¹⁸⁾と主張したが、中国の読者がイデオロギー優先の文学にあきた時期に、清張文学は紹介されたのである。いわゆる「文学の大衆性」というマルクス文芸論のスローガンはこの時代の中国においてもよく唱えられていた

が、「文化大革命」を通して、紋きり型の作品が横行していたので、清張作品の持っている「大衆性」に中国の読者が魅力を感じたのであろう。たとえば、最初に松本清張が読者大衆の間に人気を呼んだのは映画「砂の器」の上映だった。「砂の器」という映画が中国大陸でブームを起こし、多くの読者は映画「砂の器」を通じて松本清張を知ったのである。一九八〇年十月には多くの読者を持った映画雑誌『大衆電影』に「砂の器」のテーマや登場人物をめぐる読者の投書特集が掲載され、大新聞の『光明日報』にも「日本の映画『砂の器』について」⁽¹⁹⁾という紹介文が掲載された。それ以来、『砂の器』が日本の推理小説の代表作と見なされるようになった。曹修林訳の『砂の器』(春風文芸出版社、一九八五年九月)が初版三万五千冊印刷して、広く読まれたのである。多くの読者は主人公の和賀英良の犯罪を通して歪んだ日本社会を見、その犯罪の原因が日本社会の差別の構造、戦争問題、資本主義の金銭関係だと認識した。そして地位や名誉や金銭のために親子の感情を捨てた彼に人間の弱さを読み取ったのである。後に、一九九八年、群衆出版社から孫明德訳の『砂の器』をもう一度出版した。また、清張は社会の底辺にいる「小さな人物」を描いて、その不幸に同情を表し、その運命に不平を鳴らしている。彼の作品には明智小五郎や金田一耕助のような名探偵が出てこないが、犯罪事件を解決する過程における推理を描く探偵小説より、犯罪の動機を探ることによって、社会悪の根源を表現した作品が多かった。清張の文学は、文章が気取りなくて、分かりやすく、リアリズムの精神を貫き、大衆読者に親しみやすい文体を作り出した。清張文学はある種の娯楽性があるが、思想性もふかい。その作品は読者に感情移入させる力を用いて、中国の読者の心を捕まえたのである。

また、清張は「社会派推理小説」の旗印を掲げた作家である。戦後に登場した松本清張は、動機の重要性を主張し、ミステリーの現実性や社会性を強く打ち出した。中国の評論家が「松本清張の作品はなぜあれほど日本に大きな影響をあたえているか、世界から注目される流派まで形成したか。その根本的なものは彼は社会に責任感を持ちながら推理小説を書いたからである」⁽²⁰⁾と指摘したように、彼が「文学即暴露」の信条を持って、その作品を通じて、政治、経済、汚職、賄賂、日米関係など、各方面に涉って日本社会の不条理を描き、批判の矛先を社会の「悪」に向けさせた。数々の名作が一九五〇年代後半から六〇年代に書かれ、日本の「高度成長の時代」を背景にしている。藤井淑禎が指摘したように、「かつては道義心なり正義感なりの精神性が歯止めとなっていたのに、物質的価値万能の風潮下では、富さえ手に入ればいいということになり、制御され飼ひ慣らされていた情念はいともたやすく事件Ⅱ犯罪へと転化してしまふ。(中略)この時期の清張ミステリーの定番である汚職や贈収賄事件の背後にあるのも、そうした根本的な価値観の転倒という出来事にほかならなかった。」⁽²¹⁾そのような価値観も「高度成長」に入った中国社会に蔓延するようになった。中国の読者が清張小説から時代の落差を感じないのは、一九八〇年代以来の中国社会にその時代の日本と似たようなところが多くなったからである。特に一九八〇年代末から一九九〇年代の初めに「中国式市場経済」が打ち出されて、経済の高度成長によって中国社会は大きく変化した。共産主義の集団精神が個人主義に転じ、利他主義から利己主義に変換された。物的欲望がますます膨らんで、道德教化も効かなくなった。官僚の腐敗や公務員の汚職は絶えず、社会治安は悪化し、犯罪は頻発する。こんな時代を生きている読者

が清張小説にリアリティを感じるのであろう。

さらに、一九八〇年代から九〇年代にかけて、日本の推理小説を含めて、さまざまな西側の探偵小説が数多く中国に翻訳・紹介された。日本の社会派推理小説は同じ東洋的な雰囲気を持ち、社会性を重視し、西洋の探偵小説が持ったゲーム感覚を捨てたから、中国の探偵小説作家に参考系をもたらした。

「世界探偵・サスペンス小説名作文庫」（群衆出版社）には『砂の器』や『眼の壁』、『ゼロの焦点』など、清張文学を代表する作品が収録されている。「社会派推理小説」でありながら、純文学と大衆文学の境界をなくした「面白い小説」である。文学の大衆性とか「通俗小説」の芸術性とかの問題を考える上で、清張文学から学ぶことは多い。清張の推理小説は中国の推理小説作家に大きな影響を与えた。葉永烈の『「殺人傘」事件』や『扮装』などの小説は『ホームズの物語』の影響も見られるが、その社会性はやはり日本推理小説からの影響だと思われる。『世界探偵推理小説大観』（上海辞書出版社、一九九五年十一月）の編者で、推理小説作家でもある曹正文はこの本の後書きで、自分の推理小説創作は松本清張や森村誠一の推理小説に影響を受けたと言っている。

推理小説作家だけではなく、いわゆる前衛作家の人たちにも大きな影響を与えた。日本を含めて外国の探偵・推理小説が大量に翻訳されるようになった一九八〇年代は、中国の「警察小説」が復興する時期である。多くの前衛小説家が探偵・推理小説の方法を取り入れて、読者を作品の中に巻き込ませる技巧を工夫した。たとえば、葉兆言の小説は清張をはじめとして日本の社会派推理小説からの影響を受けていた。『古い話』『最後』『五月の黄昏』などの小説から、犯罪の過程や推理のプロセスを描写するより、犯罪者の動機や人生の不条理さ

を描写するのに力を入れたと読み取れる。

一九八〇年代、推理小説のブームを起こした日本の推理小説の翻訳は、今ほどのようになっていくか。「衰退説」もあるし、脈々と中国の大衆読者の間に浸透しているともいえる。「衰退説」を持ち出したのは外国文学の翻訳・出版をメインとした訳林出版社の社長の李景端である。その「中国における日本推理小説の盛衰」⁽²²⁾という文章では、中国の出版業界の動向を分析して、一九八〇年代から九〇年代にかけて、日本の推理小説が大量出版によってブームを引き起こした反面に、質の悪い翻訳が氾濫して、翻訳推理小説の読者を裏切った。通俗化を求める大衆読者にこびる装丁や印刷が翻訳推理小説を低俗化させたりしたために、日本の探偵・推理小説の持っている思想性や芸術性を損ない、読者が離れるようになったと指摘している。確かに、中国では探偵・推理小説を出す出版社の数がかなり減り、かつて、何十社もの出版社が争って日本の探偵・推理小説を出版する現象も見られなくなったが、群衆出版社や珠海出版社のような専門的に日本の探偵・推理小説を出版するところがより健全に読者の読書志向をリードするようになった。一方、日本の探偵・推理小説が二十何年間にわたって、中国の読書界に与えた影響は無視できない。中国の読者にとって、その受容を通じて日本文学の享受だけではなく、日本社会を理解するのも役にたったのである。

いうまでもなく、中国において、探偵・推理小説の研究と評論が立ち遅れているのは最大の問題である。前にも触れたように、翻訳小説の大量出版に対して、評論や研究があまりに貧弱である。今回の受容史の研究をキッカケにして、

中国における日本の探偵・推理小説の研究を推進していきたい。

注

- (1) 魯迅、「祝中俄文字之交」、『文学週報』第一卷第五、六号合本、一九三二年十二月。『魯迅全集』四、『南腔北調集』、人民文学出版社、一九八一年、引用は筆者訳。
- (2) 阿英、『小説閑談四種』、上海古籍出版社、一九八五年八月、引用は筆者訳。
- (3) 江戸川乱歩、『探偵小説四十年』上、『江戸川乱歩全集』第二十巻、講談社、一九七九年七月。
- (4) 「私立淡江中学卒業（修了）名簿」台湾、私立淡江中学、二〇〇三年。
- (5) 今和次郎、『新版 大東京案内』、中央公論社、一九二九年十二月。
- (6) 湯偉康等編、『租界百年』、上海画報社、一九九一年。
- (7) 郭建英、『建英漫画集』、上海良友圖書公司、一九三四年六月、引用は筆者訳。
- (8) 同注(6)。
- (9) 同注(5)。
- (10) 王定九、『上海門徑』、上海中央書店、一九三二年。
- (11) 「上海電影院的發展」、『旧上海史料彙編』、上海通社編、一九三七年六月。
- (12) 鄭振鐸、「映画館と舞台」、『文学週報』第四卷、一九二七年、引用は筆者訳。
- (13) 楊帆、「都市化を進めるべき」、『人民日報海外版』、二〇〇一年四月三十日、第十四頁。
- (14) 隨便、「都市の傷跡」、天津不動産ネット・天津業界フォーラム、二〇〇四年十一月十九日。
- (15) 趙徳遠、「日本現代リアリズム作家松本清張」、『日本文学』、一九八三年一月。
- (16) 金中訳、山東文芸出版社、一九八五年。
- (17) 『辞海』、上海辞書出版社、第一版、一九九九年一月。
- (18) 藤井康榮編、「作品と完全年譜」、『松本清張の世界』、一九九二年十月。
- (19) 「日本の映画『砂の器』について」、『光明日報』、一九八〇年六月二四日。
- (20) 黄沢新、宋安娜、『探偵小説学』、百花文芸出版社、一九九六年八月。
- (21) 藤井淑禎、『清張ミステリーと昭和三十年代』、文春新書、一九九九年三月。
- (22) 李景端、『中華読書報』、二〇〇五年四月二七日。

中国における日本女性推理小説の翻訳と紹介

北京師範大学外文学院 林濤

中国での日本推理（探偵）小説の翻訳は早くも二十世紀の最初の二十年間に
なされ、しかも一時的に翻訳文壇の王様の地位さえ獲得していたⁱ。しかし、
翻訳された本の種類にしても、発行された部数にしても、一九八〇年代に入っ
てからの二十年間は圧倒的に多いと言わなければならない。長い間の閉鎖から
一旦開放されると、様々な外国の文芸思潮や文学ジャンルがまるで洪水のよう
に飢渴している中国の大地に入り込んできた。当然、それまでに排斥されてい
た日本推理小説も例外なく大量に紹介翻訳されてきた。中国国家図書館の所蔵
目録によると、一九七九年から一九八六年までの八年間、翻訳出版された日本
推理小説は一名の作家の五五種類のものがある。その中で、森村誠一は一五
種類、松本清張は一一種類を占め、各種の本の発行部数も三、四万からスター
トしている。殊に、森村誠一の『人間の証明』『野生の証明』『青春の証明』を
はじめとする一連の作品は、再販や重訳、映画の脚本なども含めて、印刷部数
が三〇〇万冊に達したという奇跡を創った。そして、翻訳と相まって、推理小
説から改作された日本の映画もその頃中国の大小映画館で上映されるようにな
った。西村寿行の原作『君よ憤怒の河を渉れ』より改編した『追捕』ⁱⁱ、森村
誠一の『人間の証明』より改編した『人証』、夏樹静子の『Wの悲劇』より改編
した『W的悲劇』などの映画は、中国全土で上映され、物語の筋は人々の茶飯

事後の話題となり、『人証』のテーマソング「麦藁帽子」、「追捕」と『W的悲劇』
のメロデーは常に大通りや横丁を付きまわっていた。そこで、小説の翻訳と
映画の上映が相助長し、日本推理小説の影響力もますます中国の大地で広がっ
た。さらに、それと相次いで、山崎豊子の『華麗なる一族』や城山三郎の『官
僚たちの夏』なども翻訳出版された。これらの小説は推理小説の範疇に入らな
いが、大抵現実社会の暗黒を暴く題材を扱っているし、筋の展開に様々なトリ
ックや、謎解きのような手法が使われている。これもまた違う角度から日本推
理小説の翻訳出版を推進したことは否めないであろう。こうしたなか、八十年
代の前半期において中国は日本推理小説翻訳の黄金時代を迎え、日本の女性推
理小説もその中の一環として紹介翻訳されてきた。もちろん、翻訳された種類
と量はとても男性のそれには匹敵できない。否、累計した女性の推理小説の発
行部数は森村誠一或いは松本清張一人のものにも適わないⁱⁱⁱ。だが、それにし
ても、女性推理小説は日本推理小説翻訳の大きな流れの中で曾て小さな花を静
かに咲かせ、そして今も徐々に香りを放っていることを忘れてはならないであ
ろう。

今現在収集した資料から見れば^{iv}、最も早く中国に翻訳紹介された日本女性
作家の推理小説は仁木悦子の『猫は知っていた』である。金岡氏の訳で、一九
八〇年に群衆出版社から出されている。当時、作家と作品について、訳者或い
は研究者は一言も触れなかった。翻訳紹介に精一杯で、そこまで手をつける暇
さえなかったのである。そこで、一八年間の歳月が経った一九九八年に至っ
てはじめて曹正文氏が『世界探偵推理小説史略』^vにおいて、作家仁木悦子の
特殊な経歴や出版された本を紹介し、『猫は知っていた』についても高く評価し

ている。

『猫は知っていた』は推理小説史上においては「第二次のうねり」と日本評論家たちに褒め称えられている。同じ年に、松本清張も推理の名編『点と線』を発表した。この二つの小説は日本探偵小説の中の陰鬱とした神秘さを一掃し、代わりに爽やかな素朴さで入れ替えた。仁木悦子は女性特有の繊細さで社会推理小説を描いている。本人は重い病気に罹っているにもかかわらず、小説は明るくて健康的なものである。細かいところに力を注いでいることが特に読者に深い印象を与えている。仁木悦子の後を継いで、多くの推理小説家は自ら進んで、「変格派」の風格を退け、社会推理小説によく用いられるリアリズムの手法を重んじるようになった。この意味で、仁木悦子は日本推理小説の発展に対して多大な貢献をしていると言えよう^{vi}。

以上引用した曹氏の文章はGoogleの検索ツールに「仁木悦子」を入力すれば、大抵のホームページに出てくる。ある意味で、曹氏の褒め言葉は仁木悦子を語る権威且つ普遍的なコードのようなものになっている。しかし皮肉なことに、まともに翻訳出版された彼女の作品は『猫は知っていた』一編に過ぎない。それ以外に、インターネットを通じて読めるものはいくつもある^{vii}が、訳者も出版社も不明である。

次に、中国語訳された女性推理小説の種類から見てみれば、二〇〇四年まで

にトップの座を占めているのは夏樹静子である。大陸だけで、単行本は二〇種類、短編は一七編が翻訳出版されている。その中で、一九九八年に群衆出版社より出された「日本推理小説文庫」シリーズの四冊と二〇〇〇年に中国国際放送出版社より出された「日本名家推理小説悲劇系列」の四冊は重みを示している。そのほかに、インターネットを通じて読める訳者、出版社不明の作品は七種類あり、「夏樹静子作品集」という中国語のホームページまでできている。さらに付け加えておきたいのは、彼女の作品は一九八七年に翻訳され始めてから殆ど絶え間なく今日まで翻訳されつづけていることである。これほど長期間一人の女性推理作家に情熱を持つことは中国においてまことに珍しい現象である。ここで、なぜ夏樹静子の作品はよく翻訳され且つ長い生命力を持っているのかと問いかけて、その理由について探ってみようと思う。

まず、何よりも再び映画の力の大きかったことに感服せずにはいられない。映画さえ好む三十代以上の中国人であれば、たとえ夏樹静子の名前は知らなくても、彼女の小説『Wの悲劇』を改作した同名の映画を心に銘じているのである。前にも触れたが、八十年代前半期は中日友好条約が結ばれたばかりのころで、各分野において両国間の交流が頻繁に行われていた。映画も遠い欧米のそれより、隣国日本のものが喜んで中国の観客たちに受け入れられた。そんななかで、翻訳第一作『愛の終結』(一九八七年)の出版よりも早い一九八五年に、夏樹静子の『Wの悲劇』を改作した同名の映画が上映され、立派な女優を目指す主人公静香、劇中劇の摩子など女性人物の惨めな運命が中国観衆の涙を誘った。こうして、ある意味では、一九八五年という時点に、映画を通じて中国の観衆たちはすでに夏樹静子の作品と向かい合っていたのである。そして、二

〇〇〇年に小説『Wの悲劇』が翻訳出版された時も、『北京日報』には『Wの悲劇』は日本社会派推理小説の女旗手と称される夏樹静子女史の優秀な作品であり、この作品を改作した同名の映画が八十年代にわが国で上映された時もセンセーションを巻き起こしたのである¹⁴ という紹介宣伝の文が載せられている。もちろんこれは出版社が読者の記憶を呼び起こし、親近感を抱かせようとする手腕であるが、しかしそれにしても、この映画は今現在でも中国の観客に影響を与え続けていることは否めないであろう。インターネットで検索した中国人女性の文章であるが、次のようなことが書かれている。

世の中にいくら偉い監督と佳作があっても、私が最も好きなのは『Wの悲劇』だ。というのは、「人生は劇の如し、劇はまた人生の如し」ということをよく解剖したからだ。

成功と失敗の間、人に知られない涙をどれぐらい流しただろう。これは劇中劇を語る映画だけでなく、実に人生舞台の活劇であり、時々刻々あなたと私の間に起こっている¹⁵。

誠にこの女性に語られたように、夏樹静子は実に推理小説の手法を借りながら人生舞台の様々な活劇を描いている。『Wの悲劇』においては、一方、書き手は倒叙推理の手法を使いながら、我々読者の手を引いて「なぜ若い孫の摩子が自分の祖父を殺したのか」という謎を解いていく。他方、謎解く過程で見せたのは愛する母に操られた娘、信頼する夫に弄ばれた妻、妻以外の女と子供を持つ祖父および金銭欲に支配されている個々の登場人物である。また、『Cの悲劇』

の場合、平穩で幸せそうに過ごしている夫婦であるが、夫が人に殺されてから、謎を解いていく妻が初めて自分と夫は本当は互いの行動するスケジュールしか知らない赤の他人であることに気づく。夫は妻に隠して他の女と関係を持ち、コンピュータによる犯罪をし、妻も妻で容疑者と内心で疑う男と恋に落ちる。このように、夏樹静子は女性作家という立場から、現代社会の中の夫婦の在り方や、男女の愛憎、家庭の問題などの題材を扱い、醜い人間関係にメスを入れている。さて、視線を中国の現代社会に向ければ、経済の快速発展に伴って人間関係がますます厳しくなり、不倫や冷淡な夫婦、親子関係、色や金銭による犯罪などが顕在的な社会問題にもなっている。翻訳された夏樹静子の作品は大抵八十年代のもので、その頃の日本の時代背景はちょうど経済が高度成長している九十年代または現在の中国と相似しているので、彼女の作品はいつそう中国の読者、特に夫の不倫や冷たい家族関係などに不満な女性読者の心を引いたのである。

夏樹静子の創作については現在調べたところ、まともな研究は見えていない。唯一指摘したことのあるものはやはり前記曹正文氏の『世界探偵推理史話』である。彼はいくつかの小説を紹介した後、次のような言葉を残している。

これらの小説から夏樹静子は女性の心理描写に長じていることが窺える。被害者にしても、犯罪者にしても、彼女たちの心理活動を読んでみると、まるでその声を聞き、その人に会ったような感じがする。このような繊細な筆致には男性作家はとても適わないであろう。

テーマの面白さや、女性心理活動の描写がうまいということは確かに中国の読者の心を魅了したが、そのほかに「社会派推理小説」という肩書きが果たした役割も大きいと言わなければならないであろう。

作家に関する紹介の部分を読んでみればすぐ分かるが、中国語訳された夏樹静子の本には、夏樹静子が大抵「社会派推理小説の女旗手」として紹介している。場合によっては、本の裏表紙に大きな文字で「社会派推理小説の女旗手夏樹静子の代表作」と宣伝文まで載せられている^x。では、どうして出版社はそれを宣伝の焦点にしているのだろうか。実はそれなりの理由が考えられる。

一九四九年から一九七八年までの三〇年間、種々の原因で中国語訳された日本の推理小説はたった一種類しかない。それは一九六五年に文潔若氏の訳による松本清張の『日本の黒い霧』である。この作品の翻訳紹介とともに、「社会派推理小説」という概念も中国に入ってきた。また、一九七九年から松本清張をはじめとする所謂「社会派推理小説」の作家たち、例えば森村誠一、水上勉、赤川次郎、西村京太郎などが紹介翻訳されてきた。こうした流れの中で、「社会派推理小説」という概念が次第に中国の読者の心に刻みこまれ、読者も「社会派推理小説」に馴染んできた。時には他のあらゆる推理小説より「社会派推理小説」は優れているという心理も持っていないわけではない。

当然、「社会派推理小説」もそれなりに読者を引き付ける魅力がある。李景端氏のそれについての説明がある程度中国一般読者のそれへの理解を代表している。「日本の社会派推理小説は、それまでの犯罪過程と謎解きを重んじ、人物の心理描写に欠けている推理小説と違って、厳密的な推理を確保する上で、犯罪する動機や社会的原因を掘ることに重点を置いている。これらの小説は現実

の社会生活を背景に、政治界、商売業者、金融界乃至国際間の複雑な闘争を表現し、また往々にして男女の葛藤や緊張させるプロットも設けられており、意外な結末になっている。なので、読者の興味を引き起こすのである。」^{xii}

出版社は読者の微妙な読書心理を利用し、さらに「女旗手」を冠して、松本清張など男性作家の後に継いで、夏樹静子を日本の女性社会派推理小説家として世に送り出し、読者の注目を引き付け、翻訳出版の事業を推し進めたのであろう。

夏樹静子に次いで大陸でより多く翻訳出版されたのは山村美紗の作品である。現在調べたところ、単行本は九種類あり、収録された短編は一〇編ある。彼女の創作の特色については依然として同じ曹正文氏の指摘以外にない。

山村美紗の小説が扱う題材は大同小異で、殆ど芸能界と関わっている。犯罪者は大抵美しい女性である。女性の立場から女性を描いているので、人物がいきいきした印象を読者に与えている。彼女の作品は日本女性推理小説のもう一つの特徴を示している…叙述はテンポが速く、言葉遣いは陰鬱で、人物の綺麗な容貌と醜い内心のコントラストが大きい。作品の売れ行きはよいが、文学性においては仁木悦子と夏樹静子ほどではない^{xiii}。

一九九〇年代半ばに入ってから、著作権の問題や推理小説の翻訳し過ぎなどの原因で、日本推理小説の翻訳出版は全体的に下火になり、二十一世紀に入ってから一層衰微の相を呈してきた。女性推理小説の翻訳出版はもともと少な

ったため、それほど目立たないが、やはり同じ状況である。夏樹静子以降、再び彼女ほど翻訳出版された作家はいない。こうした状況の中、小池真理子の名を挙げなければならない。二〇〇〇年から二〇〇四年までの間、彼女の作品は直木賞を獲得した『恋』をはじめとして単行本が六種類も翻訳出版された。特にここで記しておきたいのは中国日本語教学研究会が南京訳林出版社より刊行された『欲望』を『日本現代文学精品注釈叢書』の一冊として強く勧めていることである。これはある意味で、中国読者の日本大衆文学、そして女性推理小説への一層深い認識を示しているのではなからうか。

今回、先行研究がまったくないと言っているほどの現状の中、二十世紀八十年代半ばから中国語訳（主に大陸で翻訳出版）された日本女性推理小説の書目を通り整理してみた。出版の状況や翻訳事情についてもある程度分析し、考えを述べたが、不十分なところが多いかと思う。また、日本女性推理小説の研究はまだ多くの課題、たとえば個々の作家の研究、個々優秀な作品の読解、そしてそれらの作品は中国の読者に如何に読まれ、受容されているのかなどが残されている。今後のことにするしかない。

注

- i 「異文化圏の読者と乱歩ミステリー」、王成著、『日本近代文学第72集』、平成一七年五月。
- ii 「追捕」「人証」「W的悲劇」はいずれも中国語訳された映画名。
- iii 女性推理小説の発行部数は大抵一〇〇〇〇冊である。

iv 付録「中国語訳日本女性推理小説書目」を参照されたい。

v 上海訳文出版社、一九九八年。

vi 翻訳はすべて筆者によるものである。

vii 付録「中国語訳日本女性推理小説書目」を参照されたい。

viii 『北京日報』、張蓉、二〇〇〇年、(年月日確認必要)

ix <http://bbs6.netease.com/ent/readthread.php> [《W的悲劇》性別的宿命或醒世恒言(影评之外)]

評之外)

x 二〇〇〇年に中国国際放送出版社より出された「日本名家推理小説悲劇系列」。

xi 「日本推理小説在中国的盛衰」、李景端、『中華読書報』、二〇〇五年四月二七日。

xii 同注v。

付録 中国語訳日本女性推理小説書目

夏樹静子

大陸

単行本

- 一 《爱的終結》，戴璨之、郭来舜訳，吉林人民出版社，一九八七年一二月。
- 二 《変性者の隐私》劉金鴻、丁濤訳，湖南文芸出版社，一九八八年九月。
- 三 《私情》，李有寛訳，湖南文芸出版社，一九八八年九月。
- 四 《女性的悲劇》，穆広菊訳，華夏出版社，一九九〇年六月。
- 五 《第三个女人…一部活生生的“罪与罰”》，頑石訳，南海出版社，一九九〇年

七月。

- 六《黑白旅路》，黄来顺译，花城出版社，一九九五年。
- 七《日本推理小说文库 青春的悬崖》，杨军译，群众出版社，一九九六年七月。
- 八《蒸笼》，杨军译，群众出版社，一九九六年七月。
- 九《M的悲剧C的悲剧》，黄来顺译，花城出版社，一九九七年。
- 一〇《目撃》，王光民译，群众出版社，一九九八年。
- 一一《風之門》，樊松萍、洪成漫译，群众出版社，一九九八年。日本推理小说文库。
- 一二《来自死亡谷的女人》，杨军（逸博）译，群众出版社，一九九八年。日本推理小说文库。
- 一三《喪失》，杨军（逸博）译，群众出版社，一九九八年。日本推理小说文库。
- 一四《第三个女人》，祖秉和译，群众出版社，一九九八年。日本推理小说文库。
- 一五《貨運来的女人》，李重民、杨军译，中国国际广播出版社，二〇〇〇年一月。《貨運来的女人》、《無形的锁链》、《無形的圈套》、《無形的情思》、《航道路灯》等五つの短編が収録。
- 一六《致命的三分钟》，杨军、李重民译，中国国际广播出版社，二〇〇〇年。《雲間賜来死亡》、《致命的三分钟》、《伊吹山庄凶案》、《黒髮的焦点》等四つの短編が収録。
- 一七《通向絞刑架的電纜車》，李重民译，珠海出版社，二〇〇〇年。《通向絞刑架的電纜車》、《執着的恋情》、《两秒鐘的死角》、《罪惡的火焰》等八つの短編が収録。
- 一八《W的悲剧》，杨军译，中国国际广播出版社，二〇〇〇年六月。

一九《M的悲剧》，杨军译，中国国际广播出版社，二〇〇〇年六月。
二〇《C的悲剧》，杨军译，中国国际广播出版社，二〇〇〇年六月。
収録作品

一《来自悬崖的呼叫》，朱立行译，《世界探案经典日本卷8——神秘的五角银币》，季叶选编，珠海出版社，二〇〇〇年八月第一版，二〇〇四年八月第二次印刷。

二《无可替代的爱》，曹昱译，《日本惊险推理小说集——无可替代的爱》，珠海出版社，二〇〇一年四月。

三《潜在心灵深处的殺意》，祝子平译，《日本惊险推理小说集——无可替代的爱》，珠海出版社，二〇〇一年四月。

四《托運来的女尸》，李重民译，《日本惊险推理小说集——無形的圈套》，珠海出版社，二〇〇一年四月。

五《無形的圈套》，李重民译，《日本惊险推理小说集——無形的圈套》，珠海出版社，二〇〇一年四月。

ネット <http://dir.sogou.com/c006/c006010002030032.html> によって読めるもの。訳者および出版社不明。

《同班同学》、《稚子証言》、《試刀傷の背後》、《跑道灯》、《砂之殺意》、《処心積慮的意外事件》、《脚板下》等。

台湾
一《影鎖》，夏樹静子、佐野洋著，薛毓華译，允晨文化実業有限公司，一九八七年。
二《失踪》，张淑懿译，志文出版社，一九八七年。

- 三《愛與罪》，日本文摘編訳中心訳，故郷出版社，一九八七年。
- 四《有人不見了》，賴育寧訳，皇冠出版社，一九八九年。
- 五《七七班機事件幕後案》，廖如儀訳，志文出版社，一九八九年。
- 六《午後二時の認問》，林敏生訳，林白出版社，一九八八年。
- 七《神秘的殉情》，朱佩蘭訳，林白出版社，一九八八年。
- 八《第三个女人》，陈玲芳訳，旺文社，一九八八年。
- 九《黑白的旅途》，朱佩蘭訳，林白出版社，一九九五年。
- 一〇《霧氷》，朱佩蘭訳，不二出版公司，一九九五年。

香港

- 一《逝去的影子》，詹竜驥訳，博益出版集團公司，一九八七年。
- 二《M的悲劇》，朱佩蘭訳，博益出版集團公司，一九八七年。
- 三《試管嬰兒風波》，劉慕沙訳，博益出版集團公司，一九八七年。
- 四《辺境之女》，葉蕙訳，博益出版集團公司，一九八七年。
- 五《虚幻的承諾》，葉蕙訳，博益出版集團公司，一九八八年。
- 六《雲間贈来的死》，葉蕙訳，博益出版集團公司，一九八九年。

山村美紗

大陸

单行本

- 一《玫瑰色的謀殺案》，郭登科選編，时代文艺出版社，一九八七年二月。
- 二《离婚旅行》，王珏、文琰訳，中国文联出版公司，一九八八年三月。
- 三《蝴蝶痣姑娘》，姚文慶訳，瀋陽出版社，一九八九年一月。

- 四《灵柩中的紫藤花》，徐斌訳，軍事訳文出版社，一九九二年四月。
- 五《代理妻殺人案》，杨冠東等訳，群衆出版社，一九九二年八月。
- 六《京都化野殺人案》，楊軍（逸博）訳，群衆出版社，一九九六年。
- 七《京都新婚旅行殺人案》，楊軍（逸博）訳，群衆出版社，一九九六年。
- 八《仿真珍珠謀殺案》，孙明德、周黎薇訳，群衆出版社，二〇〇〇年。
- 九《新幹線劫持案》，張宛如訳，中国国際广播出版社，二〇〇〇年。《新幹線劫持案》、《精心策划的座位号》、《三份遗嘱》、《致命的遗忘物》、《偽造的現場》、《抱猴子的少女》、《死者的琴声》、《血紅的指甲》等八つの短編が収録。

収録作品

- 一《以眼還眼》，劉京華訳，《日本惊險推理小説集 愛的証明》，珠海出版社，二〇〇二年二月。
- 二《颇费心计的亲子鉴定》，王红芳訳，《日本惊險推理小説集 極至的殺人创意》，珠海出版社，二〇〇二年二月。

平岩弓枝

大陸

- 一《女人的幸福》，武繼平、王雲燕訳，吉林人民出版社，一九八七年。日本大衆文学名著叢書。

- 二《記着我的愛…想你，在暮色里》，宋一庙訳，海口南海出版社，一九九一年五月。

- 三《魔兽奇案》，張蘇亞訳，群衆出版社，一九九二年。

台湾

一 《旅情》，朱佩蘭訳，联京出版事業公司，一九八四年。

二 《葡萄酒街的惊悚》，張幼春訳，皇冠出版社，一九八七年。

三 《隣居の紅花》，朱佩蘭訳，星光出版社，一九八七年。道豫文库。

四 《女人的海峡》，朱晓蘭訳，小暢書房，一九八八年。教養文库。

五 《沙漠之春》，朱佩蘭訳，林白出版社，一九八八年。

六 《女人的四季》，石小婵訳，小暢書房，一九八八年。教養文库。

七 《花祭》，蔡馥匡，星光出版社，一九八八年。

八 《想你，在暮色里》，李美旋訳，旺文社，一九八八年。

九 《日本女人》，葉明訳，联京出版事業公司，一九八九年。

一〇 《女人的算盤》，葉明訳，联京出版事業公司，一九八九年。

香港

一 《夫婦探案》，朱佩蘭訳，博益出版集團公司，一九八八年。

小池真理子

大陸

一 《恋》，芳子、静子訳，文化芸術出版社，二〇〇〇年十二月。日本女作家名作

系列。

二 《沈黙的殺意》，曹姮訳，文化芸術出版社，二〇〇一年。

三 《小池文集》，文化芸術出版社，二〇〇一年。《恋》《狂月》《天時》《沈黙的殺

意》等四つの小説が収録。

四 《天時》，王禹訳，文化芸術出版社，二〇〇一年。短編《去看月亮》《蠟燭亭》《

天時》《在皺褶中的仮寐》《淪落》《安寧的果実》等が収録。

五 《狂月》，冯芳訳，文化芸術出版社，二〇〇一年。

六 《欲望》，甘能清注訳，南京訳林出版社，二〇〇四年。日本现代文学精品注訳

叢書。中国日語日語教学研究會推薦。

台灣

一 《恋》，龚邦華訳，方智出版社，一九九八年。日本女作家系列一。

仁木悦子

大陸

一 《猫知道》，金岡訳，群衆出版社，一九八〇年。

ネット <http://book.myrice.com/book/52/105123.html> を通じて、以下のよ
うな作品が読める。ただし、訳者および出版社が不明。

《小熊貝貝的秘密》，《遙遠之凶》，《市井騎士》

台灣

一 《林中之家》，朱佩蘭訳，民生報社，一九八四年。

二 《林中之家…日本十大推理名著全集6》，曾美莉訳，希代出版社，一九八七年。

三 《有棘的樹》，林敏生訳，林白出版社，一九八八年。

四 《黄色的誘惑》，葉石濤訳，林白出版社，一九八八年。

五 《冰冷的街道》，林敏生訳，林白出版社，一九九四年。

香港

一 《黒緞帶》，葉石濤訳，香港博益集團出版公司，一九八七年。

二 《黒猫知情》，朱佩蘭訳，香港博益集團出版公司，一九八八年。

宮部みゆき

大陸

一《模倣犯》，胡燕、韦和平、乔君訳，中国友誼出版公司，二〇〇四年七月。百

世文库。

二《理由》，乔君訳，中国友誼出版公司，二〇〇五年一月。百世文库。

台湾

一《魔術的耳語》，商周出版，二〇〇四年。

二《獵捕史奈克》，劉子倩訳，商周出版，二〇〇五年。

三《模倣犯 上》。

四《模倣犯 下》。

山崎洋子

大陸

収録作品

一《夫妻對話》，曾文熙訳，《世界探案經典日本卷6——紅蜘蛛》，季葉選編，珠

海出版社，二〇〇〇年八月第一版，二〇〇四年八月第二次。

台湾

一《花園謎宮》，何芸訳，皇冠出版社，一九八七年。

二《横浜神秘骨牌》，傅君訳，皇冠出版社，一九八九年。

桐野夏生

大陸

一《越界》，于近江等訳，山東文芸出版社，二〇〇〇年七月。

二《濡湿面頰的雨》，安冬生訳，貴州人民出版社，二〇〇〇年。

台湾

一《柔嫩的脸頰》，林玉佩訳，皇冠文化出版公司，一九九〇年五月。

二《濡湿面頰的雨》，林敏生訳，台湾英文雜誌社，一九九七年。

三《OUT——主婦殺人事件》，林敏生訳，台湾東販公司，二〇〇〇年。

乃南アサ

大陸

一《6月19日的新娘》，祖秉和、包容訳，群衆出版社，一九九八年一月第一次

印刷，一〇月第二次印刷。

二《復讐的齒》，鄭民欽訳，群衆出版社，一九九八年一月。

三《幸福的早餐》，劉建民訳，群衆出版社，一九九八年。

坂東真砂子

大陸

一《虫》，赵建勋訳，中国电影出版社，二〇〇四年六月。

台湾

一《狗神》，林文琪訳，台湾國際角川書店，二〇〇一年。

福井晴敏

大陸

一 《代号12》，宋再新訳，山東文芸出版社，二〇〇〇年。

小泉喜美子

大陸

収録作品

一 〈虚幻の情人〉，馬宇航訳，《日本惊悚推理小説集——無形の圈套》，珠海出版社，二〇〇一年四月。

平林初之輔の探偵小説論

北京師範大学 王志松

平林初之輔は、二十年代に活躍した日本プロレタリア文学の批評家であり、探偵小説の愛好者でもある。その愛好ぶりは、「私も、以前には大部探偵小説を耽読したことがあつた。(略)黒岩涙香の二三十冊もある翻案物を、神楽坂の貸本屋から次々にかりて来て一ヶ月かそこいらで大部読んでしまつたこともあつた。(略)『新青年』や博文館や金剛社あたりで出してゐるシリーズは大抵よんでゐる」という回想からよくうかがわれる。実のところ、平林は、愛読のみならず、「山吹町の殺人」(一九二七年「新青年」一月号)や「人造人間」(一九二八年「新青年」四月号)等の探偵小説を創作したり、「探偵小説壇の諸傾向」や「日本の近代的探偵小説——特に江戸川乱歩に就て」等の評論も発表したりしている。注意すべきなのは、これらの小説と評論を発表した期間が、ちょうどプロレタリア文学運動が勃興した時期と重なつてゐるということである。すなわちプロレタリア文学運動の推進者として、平林は「プロレタリアの文芸運動は文芸運動であるよりも先づプロレタリアの運動であることを念頭におかねばならぬ」と、文学の政治性を主張している一方、探偵小説をも耽読してゐたのである。ここには、明らかに理論主張と読書嗜好の引き裂き目が見られる。しかし、平林のこういう理論的整合性の欠如を非難するよりも、その引き裂きによって生じたプロレタリア文学理論と探偵小説論との間のダ

イナミズムをより注目すべきであろう。本論では、プロレタリア文学運動とは違った探偵小説の文脈で、平林の探偵小説論を考察した上で、さらにその文学観の内実を検討してみたいと思う。

一

日本探偵小説の源流は明治期黒岩涙香等が翻案した外国の探偵小説に遡ることができる。しかし、明治期に探偵小説は文学的に価値の低いものと看做されていたのである。評論家島村抱月は、「思ふに探偵小説愛読者の多数が審美的好尚の極めて幼稚なるは論勿し、探偵小説みづからも亦余味津津忘れがたき美的悦楽を吾人に与ふる」³、ことはできないと言つて、さらに探偵小説が「小説」と名乗るのは僭越だときめつけている。大正期に入つて、探偵小説の翻訳は一つのピークを迎えた。金剛社は「ルパン叢書」の次に「ルレタビーユ叢書」に手をつけ、さらに「世界伝奇叢書」「万国怪奇探偵叢書」などと、探偵小説を組み入れたシリーズを発行していった。その他に白水社、紅玉堂、アルスなども競つて探偵小説を出版していった。一九二〇年「新青年」の創刊、さらに同年九月からの「探偵傑作叢書」(博文館)五〇冊の刊行にいたり、探偵小説はようやく日本に定着したのだといえよう。探偵小説専門誌としての「新青年」は外国の探偵小説を精力的に紹介するほか、江戸川乱歩や横溝正史など日本の探偵小説家をも育てあげた。もう一方では、谷崎潤一郎や佐藤春夫や芥川龍之介など純文学の作家たちも探偵小説の創作に手を染め、探偵小説の文学的地位を高めようとしていたのである。そこで、二十年代の文壇では、探偵小説の芸

術的価値をどう見るべきか、対立した二つの見解が現れたのである。

その一つは、探偵小説に独自の価値を認めないで「たゞ一個の文学としてすぐれたものであつて、その中に探偵小説的要素を備へたもの、例へば、ドストエフスキーの『罪と罰』の如きを探偵小説の模範となす見解である⁴。この見解は、探偵小説の語義を拡大して、犯罪文学というふうに解釈して、世界のすぐれた殆どの小説に探偵小説の要素が含まれているとしている。もう一つは「探偵小説を他の一般の小説から区別された独自の存在として、それ自身に特有の価値を附し、ドストエフスキーの作品よりも、ルブランの「リュパン」物とか、コナン・ドイルの「ホムズ」物とかを探偵小説としては上位に置かうとする」見解である⁵。

前者の見解は、文学史上の傑作である「罪と罰」を探偵小説の類に取り入れることによつて、探偵小説の文学的価値を高く評価しようとならつてゐるが、実のところ探偵小説の独自性を一般の小説に解消されてしまつたのである。平林は明確にこのような見解に反対するのであつた。

私の見解はほゞ後者に傾いてゐる。といふのは、探偵小説といふひとつのカテゴリーが、現在では既に動かすべからざる存在だからである。これは私の趣味からさう言つてゐるのではない。私は寧ろ、探偵的といふ様な特殊な価値よりも、もつと広い芸術的な価値に富む作品を好むのであるが、探偵小説が独自の存在権をもつとすれば、探偵小説をして探偵小説たらしむる特殊の価値を重視しなければならないといふ理論的要請を無視するわけにゆかないからだ。サイダーと紅茶とを両方とも飲物であるからとい

つて、二つの価値の優劣を同じ尺度できめるわけにいかないのと同じ道理である⁶。

明治四〇年代、「平凡な人間の平凡な生活」を描くべきだという自然主義文学は文壇の主流を占めていたのであるが、その平凡さを追求するあまり、大正時代、作者周辺の生活を描くような「私小説」や「心境小説」が夥しく出てきた。このような文壇の流れに対して、平林は、探偵小説が独自の芸術的価値をもっているとして、「平凡な人間の平凡な生活をどれだけ迫真の筆で描写しても努力は徒勞に終わつてしまふ。人生の真を描くといふモットーも探偵小説にはあてはまらない。少なくともそれらのことは第二義的なものとして後方へおしやられる」と強調している⁷。

では、探偵小説の第一義とは何であろうか。平林によると、読者に驚異を与える、恐怖を与える、何等かの強烈なエキサイトメントを与えるという。「それを与えることに成功すれば、探偵小説として第一義的なものに成功したことになる。その上で、普通の小説がねらつてゐるのと同じ効果をねらふのはよいことであるが、この順序を倒逆することは許されない⁸」。平林は、さらに探偵小説を成り立たせる六つの条件を次に挙げている。

第一の条件は取り扱つてゐる事件が有り得る事件であり、犯罪や探偵の方法が実行し得るといふことである。

第二に、探偵小説の方法が科学的である必要がある。

第三に、舞台はなるべくその国の首都若しくは枢要都市が中心になつてゐる

のがよい。

第四に、犯罪者と探偵とが競争する場合にはほゞ五角の腕前であることが必要である。

第五に、科学的であつても、そして、現実的ではあつても、常識的でないことが必要である。

第六に、犯罪の背景に時事問題や、国際問題などがあることは一向差支へないが、それが安価な教訓的であつたり、わざとらしい愛国心の鼓吹であつたりしてはいけない。⁹

以上の条件からわかるように、平林は特に探偵小説で取り扱う事件の科学性と現実性、そして現実的範囲で許される意外性を強調している。「現下文壇と探偵小説」という文章で、平林はまた探偵小説の独自の価値を次に挙げている。

- 一、筋のすぐれてゐること
- 二、サスペンス
- 三、トリック
- 四、テンポ
- 五、消極的条件¹⁰

最後の「消極的条件」とは、「探偵小説における推理過程は、常に現代の知的水準を突破してはならぬ」ということを指しているのであり、やはり取り扱う事件の現実性を強調していると見てよからう。

「筋のすぐれてゐること」に関して、次のような説明がある。筋というものは一般の小説にとって必ずしも重要ではない。筋のない小説も可能であるし、実際にもある。殊に自然主義以後の日本の小説では、筋は極度に軽蔑され、何等か纏つた筋のあることは却つて作品の真实性を損うものとすら考えられていた傾向がある。それに対して、探偵小説においては一貫した、変化に富んだ筋があるということは絶対に必要である。そして筋が自然性に富んでいるということよりも、筋が論理的に整然と構成されているということが要請される。したがつて探偵小説において取り扱われる世界は現実の世界であることを必要としない。ただボシブルでさえあればどんな事件でも探偵小説の筋の中へ織りこまれて効果をもち得る¹¹。

ただし、筋は探偵小説のみならず、凡ての大衆的小説にほぼ共通している条件であるため、「筋のすぐれてゐる」ということは、まだ探偵小説の絶対的な条件だとは言えない。「読者にサスペンスをもたるといふ事、そして読者を最後の数頁迄、五里霧中に彷徨せしめるといふ事こそ探偵小説の独自の独自の条件である」¹²。サスペンスというものは、必ずしもある犯罪を描いて、その犯人を最後まで読者に知らせないということだけを意味しているのではない。犯人の見当はついてもよいし、又はつきり犯人がわかっている場合でもかまわない。そういう場合には、犯罪の動機や方法、若しくはその捜査、発見の手續、そうしたもののうちのどれか一つをサスペンスとして残しておく必要がある。すなわち、読者に途中でこれでみんな済んでしまったのだと思わせてはならない。これからどうなるかという期待を最後までつないでゆかねばならないのである。

「テンポの速さ」は、また平林が重視する探偵小説の条件の一つである。彼によると、探偵小説では外的事件の進行が大切なのであって、それと関係のない細々しい描写は、それがどんなに文学的に秀れていても、結局探偵小説として効果を減殺する役割しか演じないという。探偵小説の重要な条件として筋が秀れているというのは、探偵小説においては凡ての描写がその筋を中心として動いてゆき、それに関係のない描写は絶対に排斥すること。描写は長い間一つのところに停滞してはならない。「筋は急行列車のやうに、休むことなく進行して、豊富な次々に起る事件で読者を送迎に違なからしめるやうにしななければならぬ」と指摘している¹³。

二

大正期の探偵小説は、「怪奇」や「意外」の要素がたくさん取り入れられているため、ロマンチズム文学の一種としてとらえた見解が比較的が多い。たとえば、佐藤春夫は次のように言っている。

要するに探偵小説なるものは、やはり豊富なロマンチズムといふ樹の一枝で、猟奇耽異の果実で、多面な詩の宝石の一断面の怪しい光芒で、それは人間に共通な悪に対する妙な賛美、怖いもの見たさの奇異な心理の上に根ざして、一面また明快を愛するといふ健全な精神にも相結びついて成り立つてゐると言へば大過はないだらう。¹⁴

確かに始祖ポーの探偵小説は推理のほかに神秘と幻想の雰囲気も漂わせている。そして、「神秘」と「幻想」などの要素は探偵小説のサスペンスをかもし出す上で時には重要な役割を果たしているということもまた否定できない。しかし、探偵小説である以上、やはり推理に主眼を置くべきであろう。江戸川乱歩は、探偵小説を「難解な秘密が多かれ少なかれ論理的に徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学である」と定義している¹⁵。平林も「たゞ一枚の切り札以外の札はすっかり次々に開放して行つて、読者とともに、事件を探索してゆくのが、探偵小説として余裕のある構成法」だと言つて、知的探索を探偵小説の主眼としている¹⁶。したがつて、「神秘」や「幻想」などを過剰に描写する当時の探偵小説に対して、平林は、「殺人や、犯罪では、どうも芸術的でない、もつと奇抜な、幻想の世界を織り出してみせるのでなければ、探偵小説が芸術の中で占める椅子が失はれるといふやうな考へから、却つて、造花のやうな力のない作品が生れることにもなる」と批判している¹⁷。

探偵小説は、知的探索を楽しむところに独自の芸術性と価値がある。しかしだからといって、単に暗号を解くのと同じように、理知の過程を紙上に記せばよいのかというと、平林はまたこれにも反対する。事件解決の過程で、只管その解決に、鮮やかなところを見せるのではなくて、犯罪そのものの動機や自然性なども考慮しなければならぬ。でないと、単なる知的ゲームに終わってしまうのである。したがつて、平林は「私のやうに、これに芸術的価値を要求する場合には、それだけでは足りない。全体の芸術的結果が問題にならざるを得ない」と指摘している¹⁸。

平林がここでいう「芸術的価値」は「普通の小説がねらつてゐる」芸術的効

果のことであり、具体的にいえば現実性と自然性のことを指している¹⁹。探偵小説を成り立たせる第一条件として、平林は「取り扱つてゐる事件が有り得る事件であり、犯罪や探偵の方法が実行し得るといふことである」としている。

この条件から、平林は、当時日本で大流行の「リウパン物語」は上乘のものとは言えないと断定している。「リウパン物語」では、ドイツの皇帝がリウパンに面会に来たり、リウパンが一人で同時に三人に変装していたりする。それは痛快には痛快であるが、現実味を損ずるといふ欠点も伴う。「一体に矢鱈に変装して神出鬼没するのは不自然な感じを与へて私などの年輩の読者には興味が余程そがれる」と批判している²⁰。この点において、平林は特に江戸川乱歩の作品を高く評価している。江戸川乱歩の作品は、「変装とか、変幻出没の超人的行為の力を借りない点に於て、兎も角、自然味をあまり損じてゐないのがこれ等を通じて作者の手柄である。そして犯罪の捜査法が、科学的である点は、近代的探偵小説の名にそむかぬものであると言へよう」と言っている²¹。

このように、平林は、探偵小説の独自の芸術的価値（知的探索）を重視しながらも、一般小説の芸術的価値も排斥していない。この両者を対立させるのではなく、むしろ、前者の芸術性をよりよく実現させるために、後者は欠かせないものとみている。このような弁証的な把握は平林の探偵小説論の一つ大きな特徴と言えよう。

平林の探偵小説論のもう一つ注意すべき特徴は、その批評性にある。当時、探偵小説は小説の一つのジャンルとして日本に生れてからまだ新しいために、探偵小説家仲間の中で褒めあうだけで批判は少なかった。そこで、平林は、「国家でもある産業の発達の当初には保護をするのだから、文芸の場合には、保護

がわるいとは言はぬが、いつまでも保護関税の温室内で探偵小説を育て上げておくのはよくない」として、日本の探偵小説のレベルを上げるために互いにもっと批判すべきだと主張している²²。特に「探偵小説のグループに於ける江戸川乱歩氏のやうに偶像視されてゐる」²³傾向があるから、彼は敢えて江戸川の作品を取り上げてしばしばきびしく批評したのである。

もとより、平林は江戸川を日本探偵小説家の第一人者として高く評価して、その発想が「奇抜で他人の追隨を許さぬところは氏の作品は天下第一品である」とも褒めている。しかし、細かい点に至ると、「まだ不自然で、迫真力が乏しいうらみがある」と指摘して、『D坂の殺人事件』に於て、古本屋と蕎麦屋との抜道のこと、臨検の時に警官の注意をひかなかつたり、切れた電球が明智がスイツチをひねつたときに偶然にいたり、『心理試験』に於て、わざと犯罪とびつたり符号した連想ばかりさせたり、『黒手組』に於て、如何に闇夜とは言へ、人間の視力は長時間のうちには暗さに適応してくる筈であるのに、牧田が、複雑な変装をしてゐる間中富美子の父がそれに気がつかかなかつたりするところなどはその一例である」と、批判的な分析をしている²⁴。

言うまでもなく、平林の批判は、探偵小説家としての江戸川を否定するのではなく、彼の成長を助長するためである。たとえば、「黒手組」に関して、その「あまりくだけ過ぎて、物語りじみた描写法をとつてゐる」と問題性を指摘したうえで、「この点に於て、探偵小説家としてのデビューをとつた作者のためにも、作者の手によつて揺籃時代を通過しつゝある日本の探偵小説の前途のためにも、私は作家の自重をのぞんでやまない」と、江戸川乱歩に対する高い期待感を隠せなかつたのである²⁵。

「陰獣」に関する批評も同様である。平林は「陰獣その他」の冒頭から率直に「私はこの作を探偵小説として非常な傑作だとは思はない」と感想を述べる²⁶。その問題は、「トリツクを次から次へ積み重ねすぎて、却って凝って思案にあまつたといふ」ところにあるとしている²⁷。その結果、「複雑な骨組をこしらへて、読者がまだ考へをまとめないうちに、作者がその骨組を根底からくつがへして、がらりと一変してしまふのである。そして最後が、無解決である」²⁸。実は、この小説は、発表された当初、好評を受けていたのである。平林が敢えて厳しく批判したのは、探偵小説界で褒めあうだけで、探偵小説の発達には不利であると認識したからである。したがって、「陰獣その他」の最後で、平林は次のように呼びかけている。

この問題については、私のやうな門外漢が探偵小説の、「温室」を荒す前に、グループの内部に於て、もつと自己批判が峻烈に行はれてあるべきであつたのだ。たとへば江戸川氏や氏と対蹠的に異にする甲賀三部氏の如きは互にもつと不遠慮に自己主張しあつて、作品に於てのみならず、理論に於ても、外国の作品に対する批評の上ではお座なりな、少年雑誌の投書家のやうなほめ言葉を交換しあつてゐるといふことは、お上品でよいのかも知れないが若し率直で、辛辣な批評が、こゝで排斥されるとするなら、探偵小説は、遂に温室の中で枯死するより外はないであらう。²⁹

前述したように、平林が探偵小説論を展開した期間はプロレタリア文学の勃興した時期と重なっている。それでは、両者はどのような関係なのであろうか。さらに、彼の探偵小説理論はプロレタリア文学運動の中でどのように位置づけべきであろうか。

プロレタリア文学が勃興した最初、まず直面した重要な問題の一つは「プロレタリア文学の大衆化」である。正に蔵原が指摘しているように、「真の意味におけるプロレタリア大衆芸術はプロレタリア芸術の最後の理想でなければならぬ」³⁰。しかし、実際には二十年代半ばごろのプロレタリア文学は「ただに五万、十万とのみではなく、わずかに三千、四千の読者観衆——しかも主としてインテリゲンチアのそれにしか迎えられていない状態にある」³¹。そこで、蔵原は「我々の全運動は、今や、切り離された前衛の運動から広範なる大衆の運動へと展開しつつある。芸術運動もまた少数の意識的分子を対象としていた時代から、意識の遅れた大衆をもその対象としなければならない時代にまで到達したのである」と呼びかけた³²。これをきっかけに、プロレタリア文学は誰のためにどのような内容と形式を取るべきか、という問題をめぐった「芸術大衆化」の大論争が起きた。

中野重治は「芸術に取つてその面白さは芸術的価値そのままの中にある」として、「今日大衆はその生活がまことの姿で描かれることを求めて居る」と言っている³³。これに対して、蔵原は「これは抽象的議論としては決して間違ではない」が、「大衆の生活をただ単に客観的に描き出したらただちにそれが大衆的芸術たりうると考えたならば、それは大いなる誤りである」と反論して、「我々はさらに、（大衆に理解され、大衆に愛され、しかも大衆の感情と思想

と意志とを結合し、それを高め（レーニン）うるごとき、芸術的形式を生み出さなければならない」と、芸術的形式の問題を提起している。さらに「必要な場合には浪花節や都都逸や、或いはまた封建的な大衆文学ですらの形式をも利用しなければならない」と提言していくのである³⁴が、残念なことには具体的にどのように利用するかは論及していない。

林房雄は大衆文学の「面白さ」に着目して、プロレタリア文学の大衆化は何よりもまず大衆に広く読まれるものとすべきだと主張している。

大衆文学は、大衆に読まれるために、「面白く」なくてはならない。遊戯的要素を多分に含んでゐなければならぬ。それは筋と事件と奔放な空想と、諧謔と諷刺と、健康な欲情と、痛快なヒロイズムに満ち満ちてゐなければならぬ。——この種の遊戯的要素は、知識階級の芸術家の極度に排斥するところである。そこでは自己懺悔と精神的苦痛に満ちたしかめつらの主人公が登場する。しかし、働く大衆の心理は知識階級の如く、しかく、自己懺悔に満ちてはゐない。ロマン・ローランも指摘したやうに彼らの生活感情は、インテリゲンチアのそれよりはるかに「動物的」である。

35 「遊戯的要素を多分に含んでゐなければならぬ」という指摘は極めて重要である。もとより「遊戯」という概念は審美活動の中で重要な位置を占めている。カントは、「遊戯」は笑い、ユーモラス、芸術と通底するところがあり、人間活動の自由と生命力の暢達を意味しているという。日本近代文学の方向を

大きく規定した自然主義文学運動が写実を主張すること自体は決して間違ではないが、ただしストーリーやユーモアや幻想などの「遊戯」の要素をすべて排斥して、写実、しかも作者自身の体験を前提にした写実を芸術的基準にしようとしたところに問題がある。一九二〇年代、芥川龍之介と谷崎潤一郎との間に交わされた「構成」をめぐる論争は、実は小説の「面白さ」と「遊戯」と関わっている。ある意味から言えば、日本プロレタリア文学運動の目標の一つは、文壇のこのような閉鎖性を打破するところにある。しかし、実際には、蔵原が指摘したように、「主としてインテリゲンチアのそれにしか迎えられない状態にある」のであった。その主な原因として、政治性を強調するあまり、「遊戯性」が無視されているのであった。したがって、林房雄が「遊戯性」の問題を提起したのはそれなりの意義があるといえよう。

しかし、林の「大衆文学論」には大きな不備があり、それは彼の定義した「大衆像」に由来しているのであった。

彼等は、知識階級の一部のものと異つて、毎日工場と仕事場にゐる。与えられた僅かの余暇を、肉体的精神的休息のために用ゐなければならないのだ。休息の最良の方法は遊戯と睡眠と栄養だ。遊戯的要素のない小説を大衆は決して読むことを欲しない。如何に尊い社会的内容を含んでゐようと、大衆に読まれない作品を大衆の文学として吾々は認めることは出来ない。³⁶

明らかに、林はあまりにも大衆の消極的要素に重心を置きすぎている。した

がって、評論家大宅壯一は、林氏の主張は、文学の「大衆化」ではなくて、全然「娯楽化」であると批判している。もちろん、文学は、ことに新興文学は、大衆に「読まれる」ことが絶対に必要である。だが、ただ単に、大衆に「読ませる」ことだけが新興文学の使命ではないことも明らかである。文学の読者として大宅が予想している「大衆」とは、文学に対する特別の教養と関心を持たないもの全体を意味するのである。「文学の大衆化」とは、このような大衆に文学を普及することであり、さらに「プロレタリア文学の大衆化」とは、このような文学を通じて、新興階級の持つている本質的に新しい精神を普及することであると、大宅は主張している³⁷。議論がここまで来ると、問題はまた論争の起点に戻ってきた。大衆化は、大衆に広く読まれるよりも、普及させて読ませるところに力点を置いているということになってしまったのである。

平林初之輔も「芸術大衆化」論争に参加したのである。彼の場合、論争が起きる前から、すでに探偵小説に関する評論を書いたことがあるので、論争に参加したときの姿勢が自ずと蔵原等の政策論と違ってくる。彼は漠然と大衆小説を議論するのではなく、まず大衆小説をいくつかのパターンに分類して、それからより具体的にその特徴を論じていくのである。彼によると、大衆小説として時代小説が一番先に現れたのだという。時代小説は「私小説」のような「従来の静的な文学、心理主義の文学」に対する反動として生れた「動く文学、行動の文学、テンポの文学」である。そこに「破壊、反逆、冒険等は常に大衆の心の中にひそむ要求」が含まれている³⁸。しかし、題材を過去に求めた「時代小説」よりも、新しく生れた探偵小説を、「もつと生々しい、もつと現実的な、もつと我々の生活と生き生き交渉のあるところからの刺激」があるものとして

高く評価して³⁹、そしてそこに探偵小説の生れ発達する原因と、大衆に広く読まれる原因を探っているのであった。

その第一の原因として、平林は近代的社会の成立をあげている。近代的社会とは、広義に言えば、科学文明の発達であり、理知の発達であり、分析的精神の発達であり、方法的精神の発達である。そして狭義に言えば、犯罪とその捜査法とが科学的になることであり、検挙及び裁判が確実な物的証拠を基礎として行われ、完成された成文の法律が国家の秩序を維持していることである。たとえば、「地下鉄のサム」が、すりの常習犯であるにもかかわらず現場をおさへられないといふだけの理由で、官憲につかまらないことや、小説ではないけれどもいつか本誌に連載された『死刑か無罪か』の主人公が疑はしい点が無数にあるにも拘らず、直接の証拠がないために無罪になるといふやうなことは、一定の法律によりて検挙、裁判が行はれてゐてはじめて起こる現象である⁴⁰。そこで犯罪を裁くために証拠を見つける「探偵」がきわめて重要になってきた。ともかく近代的な社会的諸制度が整備されて、探偵小説が初めて誕生したのである。

第二に、資本主義の発達に伴う富の集中、大富豪の出現、華美な生活、信用取引の発達、官吏商人等の不正行為の増加、その他これに類似の様々な生活現象は、益々一般人の探偵小説的興味を刺激し、探偵小説を盛んならしめるのである⁴¹。探偵小説は、社会の暗い面を暴くことを主眼としているから、「権威に対して著しく非妥協的である。事大主義と、中庸主義とを全く無視する。そこには退屈な談義もなければ、平凡な生活や心理や出来ごとのくどくどしい描写もない。すべてが異常であり、非教訓的であり、冒険的であり、反抗的であ

る。探偵小説は風俗主義に対する一つの挑戦であるといへる」⁴²

第三に、探偵小説は強烈な刺激を読者に与える。現代人の生活のテンポは第一次世界大戦前の人の生活と較べると非常に速くなった。エレベーター、タクシー、無線、飛行機、その他これに類似する機械文明を構成するエレメントは、現代人の生活の中へ、しっかりと織り込まれてくるようになってきた。筋の進行の緩慢な従来のロマンスや、わかりきったモラルを説く教訓小説などは、もはや現代人の生活から分離してしまい、それらのものは現代人に刺激を与えるに足りなくなった。探偵小説はこの点において、現代人の嗜好に最もよく投じているとしている。

したがって、探偵小説は決して一般に言われているように知的ゲームだけのものではなく、「現代人の生活の要求に答へる何物かをもつてゐる」から、大衆に広く読まれるのであったと、平林は探偵小説の流行原因を説明している。平林によると、「文学」の目的は三つあるという。

- A 文学とは、私たちが、その思想感情を表現するにあたつてとる一つの形式であつて、発表或は表現そのものが既に文学の目的であり、それ以外に目的はない。
- B 文学の目的は、読者をよろこばすことにある。
- C 文学の目的は、啓蒙的なものである。文学作品は読者を教えるものをもつてゐなければならぬ。それによつて人生を、社会をよりよくするものでなければならぬ。⁴³

探偵小説はどちらかと言えば、「文学の目的は、読者をよろこばすことにある」Bにあたる。プロレタリア文学運動の推進者として、平林はいうまでもなくCの「社会性」、「政治性」を重視している。しかし、彼は、文学の「目的及び機能は、社会が進化し、従つて文学そのものが進化するにつれてかはつてゆく」として、「ただ唯一絶対の目的を文学に課するわけにはゆかぬ」と認識している⁴⁴。したがって、プロレタリア文学を提唱していると同時に、積極的に探偵小説論も展開させたのである。それは、彼はこのような柔軟な文学観があるからこそ探偵小説を支持するというよりも、むしろ探偵小説の耽読にふけた読書経験から、当時ややもすれば政治主義或は「芸術自律主義」の極端に傾きやすかつた文学観とは違つた文学の新しい可能性を提起したのだといえよう。

注

- 1 平林初之輔「私の要求する探偵小説」『平林初之輔文芸評論全集』中巻 一九七五年五月 文泉堂書店 p.348
- 2 平林初之輔「文芸運動労働運動」『現代日本文学全集55』 一九七二年一月 筑摩書房 p.12
- 3 『日本推理小説史』(中島河太郎著 一九九三年四月 東京創元社 p.145)より引用。
- 4 平林初之輔「現下文壇と探偵小説」『平林初之輔文芸評論全集』中巻 一

- 九七五年五月 文泉堂書店 p352
- 5 同注 4 p352
- 6 同注 4 p352
- 7 平林初之輔「陰獣その他」『平林初之輔文芸評論全集』中巻 一九七五年五月 文泉堂書店 p368
- 8 同注 7 p368
- 9 同注 1 p349 - 350
- 10 同注 4 p354 - 355
- 11 同注 4 p353
- 12 同注 4 p354
- 13 同注 4 p355
- 14 佐藤春夫「探偵小説小論」『新青年』増刊 一九二四年
- 15 『日本推理小説史』（中島河太郎著 一九九二年四月 東京創元社 p218）より引用。
- 16 同注 7 p365
- 17 平林初之輔「探偵小説壇の諸傾向」『平林初之輔文芸評論全集』中巻 一九七五年五月 文泉堂書店 p341
- 18 平林初之輔「日本の近代的探偵小説」『平林初之輔文芸評論全集』下巻 一九七五年五月 文泉堂書店 p226
- 19 この点に関して、久米正雄は「探偵小説と人間味」（『新青年』八月増刊号 一九二四年）で次のように指摘したことがある。「近來の探偵小説——殊に短編に至つては余り技巧的になり過ぎたとは云はれるかも知れないが、
- 底知れぬ奇智と才能とは確かに賛美に耐へない。それと同時に、探偵小説にもこれから性格描写、人間味といふことが基調されて書かれなければならぬと思ふ。」
- 20 同注 1 p349
- 21 同注 18 p226
- 22 同注 7 p366
- 23 同注 7 p367
- 24 同注 18 p226
- 25 同注 18 p226
- 26 同注 7 p364
- 27 同注 4 p355
- 28 同注 7 p365
- 29 同注 7 p367
- 30 蔵原惟人「理論的三、四の問題」『蔵原惟人評論集』第一巻 一九六六年一〇月 新日本出版社 p211
- 31 蔵原惟人「芸術運動当面の緊急問題」『蔵原惟人評論集』第一巻 一九六六年一〇月 新日本出版社 p173
- 32 蔵原惟人「無産階級芸術運動の新段階」『蔵原惟人評論集』第一巻 一九六六年一〇月 新日本出版社 p84
- 33 中野重治「芸術の大衆化論の誤りについで」『現代日本文学全集55』一九七二年十一月 筑摩書房 p263, 260
- 34 同注 31 p171, 173

- 35 林房雄「プロレタリア大衆文学の問題」『近代文学評論大系6』一九七三年一月 角川書店 p144
- 36 同注 35 p144 - 5
- 37 大宅壮一「文学の大衆化と娯楽化」『大宅壮一全集』第一卷 蒼洋社 一九八一年一〇月 p66 - 7
- 38 平林初之輔「大衆文学について」『平林初之輔文芸評論全集』中巻 一九七五年五月 文泉堂書店 p183
- 39 同注 38 p183
- 40 同注 18 p221
- 41 同注 18 p222 - 3
- 42 平林初之輔「探偵小説の世界的流行」『平林初之輔文芸評論全集』下巻 一九七五年五月 文泉堂書店 p652 - 3
- 43 平林初之輔「文学の本質について」『現代日本文学全集55』一九七二年一月 筑摩書房 p30
- 44 同注 43 p30

高度成長期における松本清張の社会派推理小説

——『黒い画集』を中心に

首都師範大学外国語学院修士コース 李菁

日本では松本清張のミステリーは〈社会派推理〉と称されている。時代の流れに乗って、松本清張は新しい角度と新しい視点をとって、創作手法には大胆な探索を試みた。それによって、松本清張ミステリーは以前の推理小説の風格を破って自己独特の流派を形成した。

松本清張が試みた推理小説は「日常性」を身に付け、「犯罪動機」を探求する推理小説である。この個人の感情的なものから、社会へ広げて、社会悪、あるいは、社会的な組織の矛盾など、そういう社会的な面にまで動機を求める創作手法は、松本清張が昭和三十年代以後創作した推理小説によく採用された。

無論、松本清張が関心を寄せたのは単なる政治の暗黒ではなく、その初期のミステリーはもともと創作の視点を日本庶民の日常生活状態に置いた。具体的に言えば、日本庶民の真実な日常犯罪の動機を探すという問題は松本清張が行った推理小説の創作手法でのもう一つ新たな試みであった。松本清張のミステリーの特徴は犯罪の動機と背景などを社会機構との関係の中に捉えていくことである。

推理小説は大衆文学の範囲に属しているために、長い間、あまり重要視され

ていない。でも、松本清張ミステリーは在来の推理小説と比べると、創作手法や、創作技巧などを非常に重視していると言える。それに、松本清張は、一九五一年、第一作『西郷札』を「週刊朝日」(春季増刊)に発表して文壇にデビューし、翌年「三田文学」に発表された『或る「小倉日記」伝』で第二十八回芥川賞を受賞した。だから、松本清張は純文学の作家として文壇にデビューしたのである。それ以後、目差しを推理小説に転じたけれど、清張ミステリーは小説の技巧をとっても重視していた。つまり、清張ミステリーは大衆文学と純文学の間に位置する文学だと言える。

中国の文学雑誌などでは松本清張についての紹介も見られるようになった。筆者が調べた範囲では専門的に清張の文学を紹介したのは、李徳純の『松本清張及び日本推理小説を論ずる』と馬軍の『大衆社会と戦後日本の推理小説』などがその代表的な論文である。前者は清張の日本戦後推理小説の歴史上における地位と作用を肯定し、清張文学の「時代感」、「リアリティ」が「推理小説を思想性と芸術性の統一に邁進させた」(1)と指摘し、同時に「清張が創作の実践によって推理小説のマンネリズムを破って、その優れた発想が文学界に新たな空気を注いだ」と論述している。後者は社会性の角度から清張の作品を解説し、「清張の推理小説の内容が日常生活と関連し、登場人物が可笑しい性格を持っていない。清張の作品が犯罪の動機と苦しい心理に重点を置いて、主題の深刻性と社会意義を深めた」(2)と述べた。

研究論文が少ないかわりに、彼の作品は多く翻訳・紹介されている。中国における松本清張の紹介は一九六五年に翻訳、出版された『日本の黒い霧』(文潔若訳、作家出版社)がその始まりだと思われる。一九七八年、中国は文化大

革命以来の鎖国状態を改めて、「改革開放」の政策をとった。文化上の飢餓状態に陥っていた読者は新鮮な外国文化を貪るように吸収した。日本文学の紹介も再開され、そのなかで『点と線』も紹介された。さらに、松本清張が読者の間に人気を呼んだのは映画「砂の器」の上映だった。王成の調査によれば、一九八〇年代には清張の推理小説は中国全域において三〇社を超える出版社から、『点と線』、『日本の黒い霧』、『砂の器』、『ゼロの焦点』、『歪んだ複写』、『眼の壁』など約四〇編もの長編小説が出版されたと言われるが⁽³⁾、筆者の調査では、中国では中国語に翻訳された松本清張の推理小説は八十二種類に達している⁽⁴⁾。それも完全な数ではないが、だいたい松本清張の推理小説の中国における受容の状況を反映できると思われる。中国では松本清張の推理小説の紹介は、八十年代に入って、そのブームになった。調査によって、八十年代に翻訳された松本清張の推理小説の数は六十六種で、総数の約八十一％に達したと分かる。こう見れば、中国では早くから松本清張ミステリーに注目し始めたと言える。しかし、本格的に清張ミステリーを研究する論文と専門著作はまだ少ないのである。先行研究の整理を踏まえて、中国では松本清張ミステリーを研究するのはとても必要だと痛感している。

一

昭和三十年代に入ると、日本経済は高度成長の段階に入った。経済の急速な発展は日本の社会と庶民の生活に大きな影響をもたらした。日本は事件なき日常を迎えてきたといわれている。庶民も自分の「生」の問題に注目し始めた。

文学の世界では、「日常性」を主題とする文学が大勢の読者を引き付けるようになった。また、出版ジャーナリズムの発達によって、週刊誌も異常なブームになった。この時流に乗って、推理小説の分野では画期的な革命が発生した。

松本清張ミステリーの出現は推理小説にフレッシュな空気を注いだ。「日常性」と「動機」への注目は松本清張ミステリーの特徴となった。「日常性」は清張ミステリーの作品に十分に現れていた。清張ミステリーの初期の短編作品は日本庶民の日常生活を多く描いた。日常生活と言ったら、もちろんそれぞれ側面があるのである。経済の高度成長期に入った昭和三十年代に、産業革命によって工業化が始まり、市民革命によって民主化が進み、社会は工業社会と市民社会に移行した。工業化に伴って、企業に個人として雇用されて働く労働者、サラリーマンが増加したが、彼らは都市に集まり、結婚して自らの家族を形成した。その結果、都市化、核家族化が進展した。このように、家族の問題は「日常性」に満ちた日本庶民の生活に疑いなく大きな問題である。「日常性」を重視した松本清張ミステリーは無論この問題へも大きな注目を与えた。昭和三十三年から三十五年六月まで『週刊朝日』に連載された『黒い画集』がこのような一種の作品集であることは疑いない。

『黒い画集』の七編はそれぞれ『遭難』『証言』『坂道の家』『紐』『寒流』『凶器』『天城越え』である。この七篇のミステリーが、それぞれの問題、たとえば女性問題、夫婦関係問題、親子問題、男あるいは女の密通問題などを反映したが、すべて高度経済成長期に見られた、日本庶民の日常家族の生活によく見られた問題である。これらの問題は非常の時刻に自然的に犯罪の動機になるのである。この時、「動機」への探求はつまり日本庶民の家族生活への探求

でもある。従って、『黒い画集』は松本清張の家庭への注目の作品化だと言える。従って、『黒い画集』は松本清張の家庭への注目の作品化だと言える。

昭和三十五年と言えば安保反対の運動で社会が騒然とした年だが、同時にこの年は、推理小説ブームが一つの頂点に達した年でもある。『黒い画集』はその「推理小説ブームの記念碑的作品」⁽⁵⁾である。しかし、『黒い画集』(決定版昭和四十六年、新潮社)の「解説」を除いて、専門的に『黒い画集』という作品集を研究した研究者がまだいないようである。解説者は評論家の多田道太郎である。彼は『黒い画集』の基調音が「不透明」だと分析した。男あるいは女の「密通」にしても『証言』『天城越え』『寒流』『凶器』、情痴の喜びにしても『坂道の家』、あるいは秘密の共有と共謀にしても『紐』、皆お互いに「不透明」の部分があり、「不透明の部分がお互いに暴きあい、結局は透明な社会に吸い取られてしまう」と、多田道太郎がこのように『黒い画集』の基調音を提示している。そして、松本清張の「日常性」とは、「このような深淵を抱え込んだ日常性であり、ここには、多数者の生活的共感が堆積されている」と論及している⁽⁶⁾。

本論では、『黒い画集』を例にして、清張ミステリーの日常性、動機などの問題を取り上げて、研究していきたいと思う。

二

本論は三つの角度から『黒い画集』の日常性を分析しようと思う。つまり、内容、トリックの設定とテキストの取材である。

内容の日常性

内容から見れば、もっともその日常性を反映できるのは『凶器』と『遭難』である。以下はその二つのテキストを例にして挙げよう。

まず、『凶器』である。『凶器』は九州の黒岩村で雑貨商の老人の死体の発見。凶器は藁打ちの木槌が有力。第一容疑者は男が言い寄っていた未亡人島子。島子を調査するが、事件当夜貸し出していた木槌には血痕は見付からず事件は未解決。四年後、刑事は自分が島子の家で食べた干し餅が凶器であったと気付く。

『凶器』という作品の舞台は九州の佐賀にとった。テキストは田舎の雰囲気を醸し出した。田舎の味を出すために、テキストの中に、方言を大量に使った。例えば、「おいでんさった(いらっしやいませ)」⁽⁷⁾、「ほんに、えぞか(恐ろしい)ことこの起りましたね」、「ない(はい)」⁽⁸⁾、「こつちへはいってくんさ」⁽⁹⁾など、方言の使用を通じて、読者は昭和三十年代の九州地方の田舎に身を置き、真实的に島子の生活環境の苦しみを感じさせられる。

また、テキストには九州地方の農家の環境を詳しく描いた。刑事が島子の家へ凶器を捜しに行ったとき、「農家とは言いながら、島子は百姓をしていないので、家の中に農具はあまりなかった。家も小さい。この地方の農家の建て方で、土間が広く、座敷が狭かった。表からはいると、土間は、裏まで抜けていて、裏口からは納屋の藁屋根が一部見えた。」⁽¹⁰⁾

「戸口から土間が裏口まで続いて、突き当たりの横が台所になっている。この辺りの農家は、ほとんどが土間にかまどを築き、そこで炊事をするのである。」
「鶏小屋があった。四五羽の鶏が小屋の中で、騒いだ。小屋の中は別状がなかった。裏側の一方には、堆肥があり、腐った藁が小積まれてあった。その先に

は、堀が水をたたえていた。」⁽¹¹⁾

「この地方は、広い田を灌溉するために、昔から縦横にクリークがつくられてある。よどんだ水には、おおうように藻が浮いていた。水道のないこの村では、井戸よりも堀の水が飲料であり、洗濯用であり、炊事用であった。」⁽¹²⁾

清張は「佐賀県神崎町莞牟田という田舎に一年ばかりいたことがあるので、そのときの記憶によって」⁽¹³⁾『凶器』の作中人物に生き生きとした生活環境を設定した。読者はこのように、読書と同時に九州地方の庶民の日常生活環境を了解するようになる。

次は、『遭難』である。『遭難』は一名の死者を出した登山が同行者の手記によって再現され、その死が犯人の計画した疲労凍死であると考えた遺族はリーダーの犯人を誘い、対決すべく同じルートを縦走。しかし妻との浮気が動機であると聞いた直後の雪崩で犯人に敗北する。

『遭難』という作品の中に、清張は登山のコース、時間、地図などを詳しく描写した。そして、「遭難」を北アルプスの鹿島槍に取った。清張は「登山を一度もしたことがない」けれど、テキストは真実的な日常性を持つために、「登山家のベテランに集まってもらって話を聞いた」⁽¹⁴⁾りしたのである。そして、ちやうど「鹿島槍の頂上には、霧が巻くともっとも迷いやすい道があった」⁽¹⁵⁾から、清張はこの真実の点を借りて、テキストの中に似ている環境を設定した。『遭難』の創作背景について、松本清張氏が以下のように述べたことがある。「これを書く前」ころから登山ブームとなり、それにつれて遭難がしきりと新聞に出るようになった。私はそれらの記事を読んで、その中に人間の作為的な遭難もあるのではないか、と疑った。山でのパーティの事故は、それが自然発生

的なものか、人為的なものか、区別が容易でない。もし人為的なもの、たとえば、過失致死に値するようなものがあれば、その過失はまた人間の作為とは紙一重の差であろう。(中略) 岳人には悪人はいない“と。(中略) しかし、この格言めいた言葉は公式としては通用するが、個々の人間の場合にはかならずしもそうではあるまい。いや、この公式的な言葉の陰にかくれた個の悪がひそんではないのだろうか。すべてがそうであるように、公式的な言葉ほど観念的に危険なものはない。」⁽¹⁶⁾

以上から見ると、松本清張が日常的現実には立脚して、日常的な生活に発生したことを借りて、作品を構想して、清張自己の独特な見方を表現したと言える。

トリックの設定の日常性

この点について、『遭難』、『凶器』と『天城越え』を例にして分析しようと思う。

『遭難』は、天候の悪化や故意の道の間違いを利用して山で同行者を死なせた話である。

テキストに、犯人の江田昌利はいろいろな悪条件を利用して、例えば、長期の天気予報を聞いて、故意に天気がよくない日に登山し、リーダーとして、故意に「(立山)の地図を、ほかの二人に指示して持つてこさせなかった」⁽¹⁷⁾、そして人為的に時間を調節し、同行者に疲労させ、この一連の条件が重なって、最後同行者を巧みに殺した。

これを実現するために、以上の条件をよく合わせなければならなく、非常に難しいと言える。しかし、可能性がないと言えない。それゆえ、『遭難』のト

リックの設定は日常的な現実¹⁸に立脚していると思う。

次は、『凶器』である。松本清張は凶器を日常生活に見える食べ物に設定した。テキストの最終部分で、多島田刑事は突然凶器は何か意識した。それは日本旧来の正月の習慣である「海鼠餅」である。「凶器は家宅搜索してもなかったはずである。血のついた餅は、島子が切って、ぜんざいに入れて煮たり、黄粉にまぶした。そして、多島田がその凶器を馳走になった。」⁽¹⁸⁾この設定は、もう一方でテキストの日常性を強めたと思う。

最後に、『天城越え』である。静岡県の中で印刷業を営む「私」は、県警察本部の老刑事田島から「刑事捜査資料」という冊子の印刷を依頼される。それには、三十数年前、十六歳当時の私が関わった事件「土工殺し」の捜査状況が詳細に記されていた。下田の鍛冶屋の息子として生まれた私は、口やかましい母親に反抗して家出をし、静岡に住む兄を頼って天城越えをする。しかし、疲労と不安から引き返す途次、修善寺の花街から足抜けしてきた若い酌婦、大塚ハナと道連れになる。ハナは前を行く土工の姿を認めると、私と別れ土工に言い寄っていく。後日、土工の死体が発見され、所持金が奪われていることが判明し、私も事情を訴かれるが、疑われることはなかった。容疑者としてハナが逮捕されるが、証拠不十分で釈放されたまま、事件は風化していく。田島刑事は私に真犯人を知っているとほめかす。

『天城越え』の事件を解決するキーポイントは、誰が氷倉に一晚を過ごしたかということである。三十年前に、刑事たちは普通の生活常識から、それは不可能だと思っていたため、その事件を解決できなかった。三十年後、老刑事は真相を知った。

「それは信州の天然氷をやっているある人から聞いたのですが、夏の暑いときなんか、人夫が氷倉にはいって、よく昼寝をするんだそうです。そのときの方法というのは、梯子を横に置いて、その上に板をならべ、その板の上に身を横たえれば、濡れたオガ屑が身体に付着しないのだそうです。……そう聞くと、三十何年も前のあのときも、たしかその氷倉の隅に梯子が立てかけてあったような気がするんです。それさえ早く気がついていれば、あの事件も別な解決になったかも分かりませんね」⁽¹⁹⁾

しかし、少年は社会の底層に生活していたために、この方法をよく知っていた。刑事たちはこの点が分からなかったため、事件を順調に解決できなかった。それで、松本清張の事件の解決の方法の設定は、日常生活での天然氷をやっている人の生活技巧から取材した。清張はこのように日本庶民の日常生活を細かく観察し、それをテキストの中に巧みに導入した。

テキストの取材の日常性

この点について、松本清張の話は一番説得力があると思う。

松本清張は『黒い画集』を終わって』という文章の中で、『黒い画集』の『遭難』について以下のように述べたことがある。

まず、『遭難』の創作背景について。

「これを書く前、ころから登山ブームとなり、それにつれて遭難がしきりと新聞に出るようになった。私はそれらの記事を読んで、その中に人間の作為的な遭難もあるのではないかと疑った。山でのパーティの事故は、それが自然発生的なものか、人為的なものか、区別が容易でない。もし人為的なもの、たとえ

ば、過失致死に値するようなものがあれば、その過失はまた人間の作為とは紙一重の差であろう。(中略) 岳人には悪人はいない“と。(中略) しかし、この格言めいた言葉は公式としては通用するが、個々の人間の場合にはかならずしもそうではあるまい。いや、この公式的な言葉の陰にかくれた個の悪がひそんではないだろうか。すべてがそうであるように、公式的な言葉ほど観念的に危険なものはない。」

「最近の新聞によると、遭難の状況によってはリーダーが過失致死罪として起訴せられるように報道されているが、もっともな処置と思う。」⁽²³⁾

次は『寒流』について。『寒流』は、ある銀行マンの話だが、多少モデルがないでもない。⁽²⁴⁾『紐』はやはり実話ものである。『黒い手帖』によると、『紐』は昭和三十一年に発生したある偽装他殺事件⁽²⁵⁾に題材をとった物語である。最後は『天城越え』である。『天城越え』の材料は実際の「静岡県刑事資料」から採った。⁽²⁶⁾

以上から見ると、松本清張は、それぞれの角度から、テキストに日常性を導入して、清張ミステリーに特有の日常性を持たせていると言える。平淡なテキストに見えるが、平淡の底にはいろいろな日常的な日本庶民の小さな「生」の問題が隠されていると言える。松本清張はこのように、ミステリーの形式で、昭和三十年代における日本庶民の日常生活での些細な問題を反映したのである。

三

松本清張の社会派推理小説は、それ以前の探偵小説と違って、新しい角度と新しい視点を取って、創作手法には大胆な探索を試みた。つまり、松本清張のミステリーは「日常性」を持つ「動機」に目をつけたのである。

清張が『黒い画集』で注目したのは、日本庶民の日常生活における心の深いところに隠されたものだと思う。この隠されたものは、何か異常なことにぶつかる、往々にして犯罪の動機になることができる。

『黒い画集』の中で、この人間の心の中に隠されたものは二種類に分けられると思う。第一種類は作中人物がはつきり分かりきったが、日常生活に表現されなかった、あるいは力を尽くして、周囲の人に隠したい秘密である。第二種類は「第二意識」と呼ばれてもいいと思うが、それは人間の心の一番深いところに隠れ、さらにはある時まで自分でも気が付かない。でも、人間がもつとも窮極の立場におかれたとき、この二種類の人間の心の中に隠されたものはひよいと飛び出し、そして人間の行為に発展し、犯罪の動機までになると思われる。

個人の欲望からの動機

昭和三十年代の日常生活において、平凡な日本庶民にとっては、彼らの心の深いところにはそれぞれ違った欲望があったに違いない。しかし、普通にはこの種類の欲望は外部に公開できなかった欲望である。それはなぜか。社会人として、この欲望はたとえ他人にさらに社会に知られたら、いつもよくない結果になるからである。

それゆえに、人間は社会生活での地位や名誉などを、力を尽くして守り、ほかの人間の目の中で自己は秘密が全然ない、すっかり透明な人間であるよう

に望んでいる。もう一方で、自分なりの秘密を持ちたい人間は、自分のその欲望をどのようにしても抑制できないのである。その欲望が毎日に強くなるに従って、外部世界に公開できない秘密が自然にもっとも多くなる。このように、自分の秘密を持ちたいと同時に、外部社会に透明な印象を与えたいのである。これは根本的に矛盾である。そこで、個人の秘密がよく守られない時、人間が破局に終わるのは自然なこととなる。もちろん、このときの人間の行為はその秘密を守ることをめぐって展開していくのである。ある時、犯罪までになる。自然に犯行の動機になる。

例えば、『紐』というテキスト。表面的には夫婦二人での生命保険金の詐取である。実際には、妻が個人の秘密（夫に隠れて愛人があった）のため、夫の命さえをも犠牲にしたかったのである。同時に、夫は死を代償として、妻を殺人罪に陥れる工夫を凝らした。これは妻への復讐である。夫としての秘密でもある。妻と夫との心理上の争い、つまりそれぞれの秘密を守るといふことは、『紐』の犯罪動機となったと言える。

『寒流』というテキストは表面的な動機は沖野一郎の桑山常務への復讐である。初めのころ、力を尽くして秘密を守るのは沖野一郎である。沖野は奈美と一緒に生活するために、家庭の安定をすでに捨てた。個人の前途さえを放棄しようとしていた時、桑山常務の突然の介入と奈美の情け容赦ない裏切りで、秘密を守らなければならない人は桑山常務の方に変わった。このとき、桑山常務は愛人を持っているという秘密を守るために、沖野を左遷させた。この秘密は会社から許されないからである。一旦暴かれたら、会社での地位と個人の出世、及び家庭の安定などは皆激しい衝撃を受けるに違いないからである。これは桑山

常務の行為の深い動機である。同時に、崩壊した家庭、奪われた愛人、望みがない前途、沖野一郎は人生での一番絶望的な境遇に陥った。復讐のほかにしようがなかった。

『証言』では、欲望の相克はそれほどあらわではない。一見、平穏な日々が続いているようである。しかし、ある日、偶然、狂暴な外部空間が石野貞一郎の秘密の中に入ってくる。この偶然は、どうしようもない力となって、あらゆる秘密を暴いてゆく。テキストでの「欲望」は性的はなやぎのほかに、秘密の楽しみというものがある。つまり、社会から隠れているということが、必須の条件であり、同時にそれが楽しみとなっている。人に見られるというのが怖い。人に見られると秘密がこぼれる。こぼれた秘密はやがて会社へ通じる。「知られたら課長という地位が危ない」⁽²⁴⁾。石野貞一郎は、現代日本の大多数の会社員と同じく、身の安全ということを重視する。しかし、安全というだけでは物足りない。安全であって、しかも会社には内緒の秘密が持ちたい。これは彼の欲望である。この欲望は家庭ではみたまはしない。「家族の間に身を置いても、彼は自分の体温の中に閉じこもる姿勢になるのだ。家庭で目をあけていると、自分の心まで冷えてくるのである。」⁽²⁵⁾

彼の心が冷えるのは、かならずしも妻の顔が狐のように尖っていたり、頬骨が出ていたりしているためではあるまい。妻が、家庭が、会社から、外部空間から見透かされる存在となっているためである。会社は、彼の存在を見透かそうとしている。石野という一人の男は、透明でなければ使いくいのである。石野はそのような透明の男として、——つまり使いやすい男として、この世に生きている。彼は外部空間から見透かされることによって身の安全を買って

るのである。

しかし、彼の心に、おそらく芽生えてくる、秘密を願う心が。会社からは決して見透かされない自分だけの秘密を持ちたいという男。この欲望の実現が、四畳半二間の女の部屋である。だがこのささやかな欲望の城は、狂暴な外部空間の、偶然の一陣の風でもろくもついえそうになる。偶然は不条理の陥穽をもつて、彼を待ちかまえていた。

もし私生活を、梅谷千恵子との共謀によって護るのであれば、いくぶんかはそれも強力となり、あるいは強力ではないまでも心の安らぎがえられたであろう。しかし実は、当の女が、外部空間の一員にすぎなかったのである。共謀は存在しなかった。梅谷千恵子の自我は、石野によってとらわれるままになってはいなかった。石野の自我がちょうど会社から逃れて自分だけの私生活の暗がりを持つとうとしたのとまったく同じく、彼女もまた、自分だけの暗がり、つまり自分の秘密の愛人を持つとうとし、持ったのである。「人間の嘘には、人間の嘘が復讐するであろうか」⁽²⁶⁾と清張は最後を締め括っている。

『遭難』は似ている筋がある。江田の妻は江田に隠れて江田の同僚と付き合っていた。江田が妻の秘密を知った後、自分が銀行での地位と出世の安全のために、妻の秘密を自分の秘密にして守った。これも彼が同僚を殺した動機となった。巧みに同僚を殺したあと、この事件はまた彼のもう一つの秘密になった。この事件が同僚の従兄に知られたあと、彼はまた同じ手段を取ってその従兄を殺した。この一連の犯罪は、江田が一つの秘密を守るために払った巨大な代償である。

第二意識からの動機

犯罪の動機となるものは、一般に、金銭の上のこと、愛欲、復讐、自己防衛といったことが、平凡な日常生活をしている以上、一番多いケースであることは無論である。表面的に見れば、『黒い画集』の中で、これらは事件が発生した動機であるけれど、清張はこれ以外に、もっと人間的な感情とか意識から生まれる犯罪を表したがる。

昭和三十年代の平凡な庶民にとって、普通の毎日を送っているときには、まったく影をもとどめていないように見えるけれど、実は、自分でも気のつかない意識を心のどこかにもっているということが考えられるのである。そして、ひとたび、何か異常な事件にぶつかると、ヒョイとその隠された意識が飛び出し、それが行為に発展し、もう一方犯罪の動機となると思われる。

『天城越え』の少年の殺人事件は、表面的に見れば、思春期の性の目覚めによって起こされた事件である。少年は自分の女が土工に奪われたと思って、土工を殺した。簡単に考えれば、それが動機だと思ふ。しかし、実際には、少年は幼いころ母親と父親でない男とが交合している場面を見たことがある。この場面は少年の頭に影をとどめて、そして彼の心に隠れて、少年さえもこれを意識していなかった。数年後、似た場面が再び少年の目の前に発生した時、この心の中に隠された意識が突然飛び出し、土工を殺す行為にまで発展した。これこそこの事件の根本的な動機だと思われる。

『凶器』の中で、島子の殺人動機は偶然の状況における自我防衛と見えるが、実際にはこの意識が早くから彼女の心に隠れていたと思う。初めの頃、生きていくため、島子は六右衛門に身を任せざるを得なかった。しかし、時間の経つ

につれて、周囲の人たちの彼女への冷淡さは、島子にとっては、生活の圧力より、もっと厳しい心理的な圧力を感じさせられていた。この圧力は彼女の心に絶えず累積して、おしまいには偶然の状況を契機に、爆発した。六右衛門この意識への反抗でもあり、生活と環境への闘争でもある。これは島子の犯行動機の根源でもある。

『坂道の家』の中で、主人公の吉太郎が、平凡な小間物店の亭主からある執念をもった情痴までになったのは、最初の源が彼の心の深いところに隠された自己が経験しなかった生活への好奇の意識から起こされたからなのだと思う。はじめはこれが愚かしいと彼は思ったけれど、一定の経済の条件が成熟した時、この好奇の意識が可能な現実になった。りえ子と偶然に会ったことが吉太郎の好奇の意識を突き動かし、最終的に自力で抜け出すすべのない境遇に陥った。そして金と商売と家庭を全部喪失した。りえ子が吉太郎の唯一の藁となった。しかし、りえ子にはヒモがあつた。そして吉太郎に囲われなくなつた。二人の衝突は事件の発生に導いた。結局、この事件は吉太郎の経験しなかつた生活への好奇の潜在意識に根ざすと思う。

『黒い画集』の七編のテキストの大部分が昭和三十年代、日本庶民の日常生活から取材されたということである。これを基礎にして、清張の生活への繊細な観察と日常生活における平凡な人間の心からの意識の動機への深い分析を加えて、清張ミステリーの創作手法での大胆な探索と試みは、このように読者の目の前にすっきり呈されるのである。これこそ清張ミステリーの独自の魅力だと言える。

動機の探求は清張ミステリーの独創だと言える。清張は動機の探求を通じて、日本庶民の日常生活を反映しなかったと言える。『黒い画集』の各テキストの問題点をそれぞれ分析したあと、清張のこの作品集の中で注目されるのは、日本庶民の日常の家庭生活における心の深いところに隠されたものだと思う。この隠されたものは、何か異常なことにぶつかると、往々にして犯罪の動機になることができる。

松本清張が注目したのは、日本庶民の日常生活に潜む個人的な動機だけではなく、『黒い画集』以後の作品では、もっと目差しを個人から社会へ広げ、社会悪とか、社会的な組織の矛盾とか、そういうものにも動機を求めたのである。

注

1. 『松本清張及び日本推理小説を論ずる』 李徳純 一九八四年第三期《外国

国文学研究》第56頁

2. 『大衆社会と戦後日本の推理小説』 馬軍 二〇〇一年第一二期《外国

文学研究》第78頁

3. 王成『中国における松本清張の受容』『週刊朝日・世界の文学』九十九号 二〇〇一年六月

4. 中国国家図書館に収蔵されている図書書目を検索したことによって得た数字

5. 「解説」 多田道太郎『黒い画集』に収録 決定版 一九七一年、新潮社 第621頁

6. 同5

7. 「凶器」〔『黒い画集』に収録 決定版 一九七一年、新潮社〕第313頁
8. 同7、第316頁
9. 同7、第313頁
10. 同7、第315頁
11. 同7、第331頁
12. 同7、第332頁
13. 『黒い画集』を終わって」（松本清張全集4 『黒い画集』に収録 一九八五年 文藝春秋）第483頁
14. 同13、第482頁
15. 同13
16. 同13、第481頁
17. 「遭難」〔『黒い画集』に収録 決定版 一九七一年、新潮社〕第101頁
18. 「凶器」〔『黒い画集』に収録 決定版 一九七一年、新潮社〕第340頁
19. 「天城越え」〔『黒い画集』に収録 決定版 一九七一年、新潮社〕第169頁
20. 『黒い画集』を終わって」（松本清張全集4 『黒い画集』に収録 一九八五年 文藝春秋）第482頁
21. 同20、第483頁
22. 「現代の犯罪」〔『随筆 黒い手帖』 松本清張 一九七三年八月 中央公論社〕第139頁
23. 『黒い画集』を終わって」（松本清張全集4 『黒い画集』に収録 一九八五年 文藝春秋）第484頁
24. 「証言」〔『黒い画集』に収録 決定版 一九七一年、新潮社〕第243頁
25. 同24、第241頁
26. 同24、第251頁
- 参考文献…
- 藤井淑禎『清張ミステリーと昭和三十年代』一九九九年 文藝春秋
- 「松本清張特集」『寶石』別冊 一九六三年六月 宝石社
- 『松本清張の世界』『文藝春秋臨時増刊』一九九二年一〇月
- 尾崎秀樹「松本清張——人と作品」『大衆文学』一九九四年 紀伊国屋書店
- 松本清張「日常性と庶民の喪失」『随筆 黒い手帖』一九七三年八月 中央公論社
- 『日常と非日常』（昭和三、四十年代）『講座昭和文学史 第四巻』一九八五年一月 有精堂編集部
- 「大衆社会の誕生——週刊誌ブーム」『証言 高度成長期の日本』に収録 一九八四年 毎日新聞社
- 松本清張「現代の犯罪」『随筆 黒い手帖』一九七三年八月 中央公論社
- 『現代家族の危機と再生 現代の夫婦』布施晶子、清水民子、橋本弘子 一九九〇年 青木書店

中国における日本の探偵・推理小説翻訳作品目録

清華大學中文學部 王中忱

作家名	作品名	譯者名	出版社	出版日期
赤川次郎	被審判的女人	宋明清	皇冠出版社	1980
	一個偵探的故事	夏日	廣西民族出版社	1985
	三姐妹偵探團	夏子	湖南人民出版社	1986
	少女的故事	梁近光	廣西人民出版社	1986
	午後的情侶	朱佩蘭	林白出版社	1986
	早春物語	葉淑珍	星光出版社	1986
	東西南北殺人事件	宋明清	皇冠出版社	1987
	三色貓狂死曲	呂慧珍	志文出版社	1987
	三姊妹偵探團	宋明清	皇冠出版社	1987
	愛情物語	宋明清	皇冠出版社	1987
	早春物語	宋明清	皇冠出版社	1987
	晴時多雲偶殺人	宋明清	皇冠文學出版公司	1987
	小偷啊要兩立大志	宋明清	皇冠出版社	1987
	三色貓探案	陸仁	志文出版社	1987
	三色貓幽靈俱樂部	廖為智	志文出版社	1987
	三色貓恐怖館	林思孟	志文出版社	1987
	血與玫瑰	廖為智	志文出版社	1987
	幽靈列車	林思孟	志文出版社	1987
	魔鬼女人	陸仁	志文出版社	1987
	東西南北	廖華鳴	志文出版社	1987

	6 個謎案： 日本名探推理系列. 7		希代書版公司	1987
	罪與 X： 日本名探推理系列. 6	史美瑜	希代書版公司	1987
	棺中美女： 日本名探推理系列. 5	遊秀月	希代書版公司	1987
	糊塗偵探謎推理： 日本名探推理系列. 3	陳桂蘭	希代書版公司	1987
	糊塗偵探登場： 日本名探推理系列. 1	陳桂蘭	希代書版公司	1987
	被埋沒的青春	陳佳佳	暖流出版社	1987
	糊塗偵探大糊塗： 日本名探推理系列. 8	陳桂蘭	希代書版公司	1987
	私奔	林敏生	林白出版社	1987
	白色的窗	鄭秀美	星光出版社	1987
	等待嫁紗	鄭秀美	星光出版社	1987
	女學生	陳佳佳	暖流出版社	1987
	請帖	葉德芬	星光出版社	1987
	上司不在的星期一	宋明清	皇冠出版社	1988
	無臉的十字架	宋明清	皇冠出版社	1988
	小偷物語	宋明清	皇冠出版社	1988

	三毛貓怪談	宋明清	皇冠出版社	1988
	打發時間殺人事件	宋明清	皇冠出版社	1988
	寂寞的獨裁者	宋明清	皇冠出版社	1988
	三姊妹偵探團. 2, 校園篇	宋明清	皇冠出版社	1988
	私奔	葉蕙	博益出版集團公司	1988
	三色貓智破連環案	曹儉, 張強	中國文聯出版公司	1988
	失蹤的少女	肖 晨	吉林人民出版社	1988
	少女青春冒險	盧曉莉	工人出版社	1988
	神秘的誘惑	李 淵	軍事譯文出版社	1988
	浴室迷霧	朱書民	黑龍江人民出版社	1988
	怪人俱樂部： 女高中生之死	甄真	團結出版社	1988
	十九歲女總經理	蘇茜	新女性雜誌社	1988
	少女星泉奇遇	高增傑等	中國婦女出版社	1988
	天使的逃亡	林敏生	林白出版社	1988
	殺之欲	呂慧珍	故鄉出版社	1988
	三色貓推理	葉蕙	博益出版集團公司	1988
	他是我的愛	陳淑蓉	旺文社	1988
	殺人音樂	葉蕙	博益出版集團公司	1988
	毒	林敏生	林白出版社	1988

	親密殺機	宋明清	皇冠出版社	1989
	雨夜列車	宋明清	皇冠出版社	1989
	小偷多多不勝捉	宋明清	皇冠出版社	1989
	幽靈同好會	宋明清	皇冠出版社	1989
	偵探物語	宋明清	皇冠出版社	1989
	花票斃命之謎	李四等	北京日報出版社	1989
	登山列車	葉蕙	博益出版集團公司	1989
	禁奏的樂章	葉蕙	博益出版集團公司	1989
	淡淡的幽靈	葉蕙	博益出版集團公司	1989
	埃及豔後的送葬隊	宋明清	皇冠出版社	1990
	華麗的偵探們	李小青	上海譯文出版社	1990
	綁嬰假殺	葉蕙	博益出版集團公司	1990
	魔之劫	葉蕙	博益出版集團公司	1990
	校園深夜營業	葉蕙	博益出版集團公司	1990
	豔婦的追逐	於長敏等	時代文藝出版社	1990
	殺人婚紗	葉蕙	博益出版集團公司	1990
	刺激的時光膠囊	宋明清	皇冠出版社	1991
	幽靈列車	靜波	南海出版公司	1991
	“殺手傑克”百年案	鍾理	文化藝術出版社	1991
	三姊妹偵探團	葉蕙	博益出版集團公司	1991
	被綁架的少女	展梁	群眾出版社	1991

	血襯衣	葉蕙	博益出版集團公司	1991
	華麗偵探團	葉蕙	博益出版集團公司	1991
	奪命試卷	葉蕙	博益出版集團公司	1991
	戀母刑警 VS 占星館主	宋明清	皇冠文學出版公司	1992
	青春共和國	宋明清	皇冠文學出版公司	1992
	情竇初開	辛超	花城出版社	1992
	灰中的惡魔	宋明清	皇冠文學出版公司	1992
	越獄狙擊. 6, 三姊妹偵探團	葉蕙	博益出版集團公司	1992
	臥底老師	葉蕙	博益出版集團公司	1992
	瘋狂的女性	江躍飛, 江躍中	安徽文藝出版社	1992
	殺之預告	葉蕙	博益出版集團公司	1992
	四季孽殺	葉蕙	博益出版集團公司	1992
	怪奇山莊	葉蕙	博益出版集團公司	1992
	代理妻殺人案, 本書還包括: 死者在空中消失	楊冠東等	群衆出版社	1992
	淺紫色周末	宋明清	皇冠文學出版公司	1993
	埃及妖後送葬隊	葉偉然	博益出版集團公司	1993
	錯體私奔	葉蕙	博益出版集團公司	1993
	與藍鬍子殉情	葉蕙	博益出版集團公司	1993

	三色貓犯罪學講座	葉蕙	博益出版集團公司	1993
	豪華絢爛殺人事件	宋明清	皇冠文學出版公司	1993
	三色貓離家出走	葉蕙	博益出版集團公司	1993
	奇幻的莎樂美	葉偉然	博益出版集團公司	1993
	午夜騎士	葉偉然	博益出版集團公司	1993
	寂寞獨裁者	葉偉然	博益出版集團公司	1993
	假婚物語	葉偉然	博益出版集團公司	1993
	忙碌的新娘	林敏生	林白出版社	1993
	隔世幽靈	葉偉然	博益出版集團公司	1994
	戀母情結三角關係	宋明清	皇冠出版社(香港)公司	1994
	三色貓海角驚情	葉蕙	博益出版集團公司	1994
	三色貓榜上無名： 三色貓探案. 17	葉蕙	博益出版集團公司	1994
	三色貓幽靈城主： 三色貓探案. 18	葉蕙	博益出版集團公司	1994
	人畜無害殺人事件	宋明清	皇冠文學出版公司	1994
	死亡相親會	葉蕙	博益出版集團公司	1994
	戀母刑警追緝令	宋明清	皇冠出版社(香港)公司	1994
	三毛貓怪談	宋明清	黑龍江人民出版社	1995
	無臉十字架	宋明清	黑龍江人民出版社	1995
	幽靈同好會	宋明清	黑龍江人民出版社	1995

	三色貓狂死曲	呂慧珍	黑龍江人民出版社	1995
	三色貓探案	陸仁	黑龍江人民出版社	1995
	僵屍空中散步	宋明清	皇冠文學出版公司	1995
	屍體不要睡	徐雋	皇冠文學出版公司	1995
	三色貓安息日： 三色貓探案. 19	葉蕙	博益出版集團公司	1995
	大決鬥不死不休	宋明清	皇冠文學出版公司	1995
	小偷物語	宋明清	黑龍江人民出版社	1995
	起承轉合殺人事件	宋明清	皇冠文學出版公司	1997
	戀母刑警三角關係	宋明清	皇冠文化出版公司	1997
	結婚紀念殺人事件	宋明清	皇冠文化出版公司	1997
	從湖底來的吸血鬼	郭清華	皇冠文學出版公司	1997
	一觸即發殺人事件	林玉佩	皇冠文化出版公司	1998
	小偷必自私	李毓昭	皇冠出版社(香港)公司	1998
	不唱歌的新娘	吳佳珍	皇冠文化出版公司	1999
	妖怪變化殺人事件	賴育寧	皇冠出版社(香港)公司	1999
	人質	竺家榮, 馬受良	世界知識出版社	1999
	千鈞一髮	曉明	世界知識出版社	1999
	私奔	孫沐嶧	世界知識出版社	1999
	復仇	蔡曉	世界知識出版社	1999

	浴室迷霧	朱書民	珠海出版社	2000
	紅色的背叛	吳品賢	皇冠文化出版公司	2000
	死者的學園祭	莫海君	臺灣國際角川書店	2000
	幽靈心理學： 赤川次郎成名系列. 一	葉蕙	博益出版公司	2001
	幽靈物語	葉蕙	博益出版公司	2001
	屋根裏，少女	葉蕙	博益出版公司	2001
	幽靈的分身	葉蕙	博益出版公司	2001
	幽靈的愛	葉蕙	博益出版公司	2001
	嬰兒床的騷動	葉蕙	博益出版公司	2001
	崩潰	葉蕙	正文社出版公司	2001
	三姊妹愛情花開	葉蕙	博益出版集團有限公司	2002
	戀母刑警偵探學	葉蕙	博益出版集團有限公司	2002
	底片	葉蕙	博益出版公司	2002
	黃金麥克風	葉蕙	博益出版公司	2002
	幽靈遊園會	葉蕙	博益出版集團公司	2002
	不尋常的一天	葉蕙	正文社出版公司	2002
	抵押少女	葉蕙	正文社出版公司	2002
	你也能當殺人犯. 上	葉蕙	正文社出版有限公司	2003
	你也能當殺人犯. 下	葉蕙	正文社出版有限公司	2003
	溫泉驚殺	李藝詩	海天出版社	2004

	三姊妹偵探團	趙鵬圖	海天出版社	2004
	奪命試卷	周建文	海天出版社	2004
	愉快的噩夢	馬麗	海天出版社	2004
	藍鬍子	白淑娟	海天出版社	2004
	自相殘殺	葉小楠	海天出版社	2004
	與死神戀愛	曹奚貴	海天出版社	2004
	越境追凶	白淑娟	海天出版社	2004
	愛情花開	周建文	海天出版社	2004
	壁櫥女屍	馬麗	海天出版社	2004
	兩個人	彭懿	接力出版社	2004
	怪奇山莊	丁勇	海天出版社	2004
	校園追殺	郭勇	海天出版社	2004
	越獄狙擊	趙立剛	海天出版社	2004
	臥底老師	崔君全	海天出版社	2004
	錯體私奔	尤莉利	海天出版社	2004
	鉅額支票	畢莫含	海天出版社	2004
	死亡約會	葉小楠	海天出版社	2004
	世紀惡魔	王海進	海天出版社	2004
	黑色詛咒	丁勇	海天出版社	2004
	美女與野獸	曹奚貴	海天出版社	2004
	獻給少女的犯罪(上下)		正文社	

	不尋常得一天		正文社	
	猶豫不前的殺意		正文社	
	萬有引力的殺意： 全二冊		正文社	
	似淚的雨		博益出版	
	岔路		正文社	
姊小路祐	金融黑幕	王瑩	珠海出版社	2004
	可怕的整容	陳薇	珠海出版社	2004
	假面官僚	高文衡	珠海出版社	2004
	越權搜查令	王磊， 吳曉惠	珠海出版社	2004
	午夜來電	虞希華等	珠海出版社	2004
	照片追凶	孫永剛	珠海出版社	2004
	姊小路祐作品集		珠海出版社	2004
阿刀田高	風物語	郭勇，張珊	北嶽文藝出版社	2004
	雪女之惑	李燕妮	中國友誼出版公司	1997
	拿破侖狂	林敏生	不二出版公司	1996
	V 的悲劇	林敏生	林白出版社	1995
	夜夜驚魂	翁淑華	晨星出版社	1993
	恐怖極短篇	柯素娥	大展出版社	1992
	過早的預言家	張怡生	萬象出版社	1990

綾辻行人	偶人館之謎	龔志明	珠海出版社	2004
	水車館幻影	王哲春	珠海出版社	2004
	迷宮館的誘惑	趙宜民	珠海出版社	2004
	十角館殺人預告	黃曉燕	珠海出版社	2004
	鐘錶館幽靈	吳崇, 張偉年	珠海出版社	2004
	黑貓館手記	曹宇	珠海出版社	2004
	奪命十角館	洪韶英	臺北皇冠出版社	1988
有栖川有栖	魔鏡	吳崇, 王忠武	珠海出版社	2003
	第四十六號密室	曉夢	珠海出版社	2003
生島治郎	覓蹤	蘇克新, 李佳羽	四川文藝出版社	1988
	陪浴小姐	藥會, 殿章	內蒙古人民出版社	1989
	追凶	林敏生	林白出版社	1998
愛川晶	化身	林敏生	林白出版社	1997
赤井三尋	恐怖的夏夜	易愛華	北嶽文藝出版社	2004
鮎川哲也	憎惡的化石	林敏生	林白出版社	1991
泡阪妻夫	浪漫的復活	黃鈞浩等	新雨出版社	2001
池井戶潤	無底深淵	吳曉玲	山東文藝出版社	2000
井沢元彦	無面之神	楊軍	群眾出版社	2000

石井敏弘	勁風下的彎道	丘懷萱	皇冠出版社	1988
石沢英太郎	唐三彩之謎	於振洲	吉林人民出版社	1986
五木寛之	陛下的高級轎車	徐秉潔	中國文聯出版公司	1987
	夏季的女兒	陳明鈺	中國文聯出版公司	1988
	豺狼的哀歌	辛超	陝西人民出版社	1988
	夏日的夢 神秘雙面佛	郭來舜, 戴璨之	北嶽文藝出版社	1990
江戸川乱歩	蜘蛛男	黃宏鑄	南京書店	1931
	飄忽不定的魔影	張書林, 秋夫	黑龍江人民出版社	1986
	來自地獄的人	梁澤華	文經出版社	1987
	透明怪人	梁澤華	文經出版社	1987
	地底魔王	梁澤華	文經出版社	1987
	怪人二十面相	梁澤華	文經出版社	1987
	黃金假面人	武繼平	安徽文藝出版社	1990
	女妖	周曉華	安徽文藝出版社	1990
	附身惡魔	朱述斌	安徽文藝出版社	1990
	少年偵探團, 二十張臉譜的怪盜	吳侃	四川少年兒童出版社	1992
	陰獸 怪人幻戲	林少華, 祖秉和	群眾出版社	1999

	女妖	周曉華	珠海出版社	1999
	黃金假面人	武繼平	珠海出版社	1999
	白髮鬼	劉輝	珠海出版社	1999
	青銅魔人	葉榮鼎	少年兒童出版社	1999
	蜘蛛人	顧培軍	群眾出版社	1999
	怪奇四十面相	葉榮鼎	少年兒童出版社	1999
	金色面具	歐陽寅 安, 顧培軍	群眾出版社	1999
	宇宙怪人	葉榮鼎	少年兒童出版社	1999
	魔法博士	葉榮鼎	少年兒童出版社	1999
	海底下的鐵人魚	葉榮鼎	少年兒童出版社	1999
	少年偵探團	葉榮鼎	少年兒童出版社	1999
	地底下的魔術王	葉榮鼎	少年兒童出版社	1999
	怪人二十面相	葉榮鼎	少年兒童出版社	1999
	人豹	龔志明, 華桂萍	珠海出版社	2000
	妖怪博士	孟文驊	珠海出版社	2000
	暗室	趙宜民	珠海出版社	2000
	巴諾拉瑪奇談	吳崇	珠海出版社	2000
	盲獸 巴諾拉瑪島奇談	崔嵐, 吳崇	珠海出版社	2000

	丈夫的懷疑	朱書民	花山文藝出版社	2000
	蜘蛛人	王亥	珠海出版社	2001
	白髮鬼復仇記	曹浩宇	時事出版社	2001
	地獄的滑稽大師	陳愛義	時事出版社	2001
	怪指紋	伍心銘	時事出版社	2001
	妖怪博士		晨曦出版社	2001
	黃金假面人	伍心銘	時事出版社	2001
	惡魔	楊國榮	時事出版社	2001
	女妖	陳愛義	時事出版社	2001
	罪犯是誰	王志新等	珠海出版社	2001
	幽靈塔	孫永剛等	珠海出版社	2001
	魔術師	閻德學, 崔嵐	珠海出版社	2001
	獵奇的後果	鄧青, 曹宇	珠海出版社	2001
	恐怖的三角公館	陶濤	珠海出版社	2001
	影子殺人	龔志明	珠海出版社	2001
	孤島之鬼	高明辰	珠海出版社	2001
	黃金豹	葉榮鼎	少年兒童出版社	2001
	恐怖的鐵塔王國	葉榮鼎	少年兒童出版社	2001
	塔上奇術師	葉榮鼎	少年兒童出版社	2001
	黃金怪獸	葉榮鼎	少年兒童出版社	2001

	奇面城的秘密	葉榮鼎	少年兒童出版社	2001
	宇宙怪人	張燕等	珠海出版社	2001
	青銅魔人	曉夢, 楊茵	珠海出版社	2001
	十字路	鄧青等	珠海出版社	2001
	二十面相	顧龍保, 吳崇	珠海出版社	2001
	透明怪人	魯鄂等	珠海出版社	2001
	黑蜥蜴	吳崇	珠海出版社	2001
	妖蟲	周潔	珠海出版社	2001
	矮子	劉軍	珠海出版社	2001
	暗星	李強等	珠海出版社	2001
	紅蠍子	葉榮鼎	山東文藝出版社	2002
	蒙面人	葉榮鼎	少年兒童出版社	2002
	追蹤金虎	葉榮鼎	少年兒童出版社	2002
	飛人怪盜	葉榮鼎	少年兒童出版社	2002
	透明怪人	葉榮鼎	少年兒童出版社	2002
	驚世妖魔	葉榮鼎	少年兒童出版社	2002
	青銅魔人	施聖茹	品冠文化出版社	2002
	地底魔術王	施聖茹	品冠文化出版社	2002
	亂步偵探作品集. 19	朱書民, 龔 志明主編	珠海出版社	2002

	亂步偵探作品集. 18	朱書民, 龔志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 17	朱書民, 龔志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 16	朱書民, 龔志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 15	朱書民, 龔志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 14	朱書民, 龔志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 13	朱書民, 龔志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 12	朱書民, 龔志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 11	朱書民, 龔志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 10	朱書民, 龔志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 9	朱書民, 龔志明主編	珠海出版社	2002

	亂步偵探作品集. 8 小五郎探案	朱書民, 龔 志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 7 小五郎探案	朱書民, 龔 志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 6 小五郎探案	朱書民, 龔 志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 5 小五郎探案	朱書民, 龔 志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 4 小五郎探案	朱書民, 龔 志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 3 小五郎探案	朱書民, 龔 志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 2 小五郎探案	朱書民, 龔 志明主編	珠海出版社	2002
	亂步偵探作品集. 1 小五郎探案	朱書民, 龔 志明主編	珠海出版社	2002
	怪盜二十面相	施聖茹	品冠文化出版社	2002
	少年偵探團	施聖茹	品冠文化出版社	2002
	邪與惡	葉榮鼎	山東文藝出版	2002
	丑角師	葉榮鼎	山東文藝出版	2002
	黑天使	葉榮鼎	山東文藝出版	2002

	綠衣人	葉榮鼎	山東文藝出版	2002
	暗黑星	葉榮鼎	山東文藝出版社	2002
	假面具	葉榮鼎	山東文藝出版	2002
	鵝毛信	葉榮鼎	山東文藝出版	2002
	不歸路	葉榮鼎	山東文藝出版	2002
	惡魔王	葉榮鼎	山東文藝出版	2002
	狂與亡	葉榮鼎	山東文藝出版社	2003
	通緝犯	葉榮鼎	山東文藝出版社	2003
	霧茫茫	葉榮鼎	山東文藝出版社	2003
	恐嚇信	葉榮鼎	山東文藝出版社	2003
	血腥館	葉榮鼎	山東文藝出版社	2003
	畸心人	葉榮鼎	山東文藝出版社	2003
	十字架	葉榮鼎	山東文藝出版社	2003
	造孽者	葉榮鼎	山東文藝出版社	2003
	噩夢塔	葉榮鼎	山東文藝出版社	2003
	迷重重	葉榮鼎	山東文藝出版社	2003
	黑手幫	季葉選	珠海出版社	2004
逢阪剛	卡迪斯紅星	洪碧娟	皇冠出版社	1987
勝目梓	職業殺手	季生譯, 王筍改編	貴州美術出版社	1988
	泣血的薔薇	敏芝, 峻岱	河北人民出版社	1988

	遭劫女	劉樵, 盧敏	湖南人民出版社	1988
	職業殺手	鴻川, 晨曦	雲南人民出版社	1988
	女惑	王欣, 董進憲	河北人民出版社	1993
京極夏彥	姑獲鳥的夏天	姚巧梅	時報文化出版公司	1998
霧舍巧	二重身宮	李豔	北嶽文藝出版社	2004
桐野夏生	濡濕面頰的雨	林敏生	臺灣英文雜誌社	1997
	濡濕面頰的雨	安冬生	貴州人民出版社	2000
	OUT—主婦殺人事件	林敏生	臺灣東販公司	2000
	越界	于近江等	山東文藝出版社	2000
	柔嫩的臉頰	林玉佩	皇冠文化出版公司	2001
草野唯雄	女繼承人	孟傳良	吉林人民出版社	1987
	爆殺預告	車忠春, 徐瀟東	山東文藝出版社	1988
	貴夫人號	楊學勤	新疆人民出版社	1989. 6
胡桃沢耕史	飛翔警察	魏玉梅	臺北皇冠出版社	1987
	俘虜	江秀桃	臺北皇冠出版社	1987
	燃燒的海峽	任國明等	北京春秋出版社	1989. 8
黑川博行	瘟神義友	于曉野, 於長敏	南京譯林出版社	2000
黑崎綠	袋中的袋鼠	遊繡月等	臺北新雨出版社	2001

黑沼健	環球之謎	沈英甲, 呂萍萍	北京海潮出版社	1991. 3
小池真理子	狂月	馮芳	北京文化藝術出版社	2001
	沈默的殺意	曹姮	北京文化藝術出版社	2001
	欲望	甘能清	南京譯林出版社	2004
小泉喜美子	無形的圈套	李重民	珠海出版社	2001
小林久三	正義之士	曲建文, 陳樺	北京軍事譯文出版社	1992. 6
小松左京	紅色的毒蛇	李重民	珠海出版社	2000
	日本沈沒	李德純	北京人民文學出版社	1975
	首都消失	陳寶蓮	臺北故鄉出版社	1986
	日本沈沒	李德純	長春吉林人民出版社	1986
	宇宙漂流記	王彥良, 王健宜	天津新蕾出版社	1987
	日本沈沒	呂茂廷	貴陽貴州人民出版社	1988
	空中都市 008	克明	安徽少年兒童出版社	1992
小峰元	阿基米德借刀殺人	上官閏平	貴陽貴州人民出版社	2000
	阿基米德借刀殺人	長安靜美	長春時代文藝出版社	2001
齋藤栄	香港旅行謀殺案	廖為智	志文出版社	1987
	棋譜血案又名殺人的棋譜	陶法義, 趙琪	甘肅人民出版社	1988

	密室迷蹤	王丕迅	廣西人民出版社	1988
	磁性棋子之謎	劉動中	人民體育出版社	1989
	香港旅行謀殺案	雷音	文化藝術出版社	1990. 8
	東京, 沒有謀殺	吳彤彤	中國文聯出版公司	1991. 6
	血案追蹤	張明贊	群眾出版社	1992. 9
	靚女曆險記	徐錦峰等	人民體育出版社	1995
佐賀潛	綴花的屍體	林敏生	林白出版社	1993
坂本光一	白色的殘像	林敏生	林白出版社	1992
笹倉明	異國來的殺人者	宋淑媛	皇冠出版社	1989
笹沢左保	愛與被愛的秘密	黃鴻章	益群書店	1991
	血海迷舟	吳曉玲, 劉滿貴	群眾出版社	1992
	噬人	林敏生	勤+緣出版社 林白出版社	1992
	不倫哀歌	周燁	群眾出版社	1995
	絕命情緣	楊軍 (逸博)	群眾出版社	1996
	大海的請帖	趙博源等	珠海出版社	2000
	罌粟花	季葉選編	珠海出版社	2004
	紅蜘蛛	季葉選編	珠海出版社	2000 ; 2004 重印

篠田節子	卡農	廖梅珠	方智出版社	1999
	女人的聖戰	中原鳴子	上海譯文出版社	2002
不知火京介	製造暴力	郭勇, 方明	北嶽文藝出版社	2004
真保裕一	罪惡的連鎖	林敏生	林白出版社	1995
	奪取	姚小燕, 陳立	山東文藝出版社	2000
島田莊司	被詛咒的木乃伊	董炯明	皇冠文化出版有限公司	2004
清水一行	七個自焚的人	謝德嶺	長江文藝出版社	1981
	神秘的億元拾款	王玉琢	江蘇人民出版社	1986
	首都圈銀行	侯貴娥	故鄉出版社	1988
	動機	孫明德	黑龍江人民出版社	1991. 8
	女董事	鍾小青	聯經出版事業公司	1996
	沈浮	李長明	外國文學出版社	1997
新野剛志	八月的馬科斯	楊洪鑾	山東文藝出版社	2002
島田一男	國際刑警偵察官		群衆出版社	1988
	蕩魔	乞食, 玉芬	河北人民出版社	1988. 8
西村京太郎	D 情報機	關燕軍	北京出版社	1982
	雙曲線的殺人案	張國錚	海口海南人民出版社	1985
	銀河命案	宋光彩等 改編	貴陽貴州美術出版社	1986

	天使的傷痕	川謙	長春吉林人民出版社	1986
	藍色列車上的謀殺案	尤之	濟南山東文藝出版社	1986
	日本殺人旅行	賴明珠, 傅伯甯	臺北故鄉出版社	1986
	雷曼湖謀影	王德文	太原北嶽文藝出版社	1986
	污染海域	陸仁	臺北志文出版社	1987
	終點站謀殺案	李方中	臺北志文出版社	1987
	東京車站謀殺案	李方中	臺北志文出版社	1987
	蜜月列車兇殺案	林思孟	臺北志文出版社	1987
	列車殺機	劉華亭	臺北星光出版社	1987
	臥鋪特快謀殺案	李方中	臺北志文出版社	1987
	天使的傷痕	張淑懿	臺北志文出版社	1987
	恐怖的星期五	李方中	臺北志文出版社	1987
	東京地下鐵殺人事件	吳桑	臺北希代書版公司	1987
	南紀殺人路線	邱夢蕾	臺北星光出版社	1987
	無畏的名偵探	林達中	臺北林白出版社	1987
	最北方的藍色特快車	洪碧娟	臺北皇冠出版社	1987
	愛之夜	李汶聯	北允晨文化實業公司	1987
	第二個目標	林達中	北林白出版社	1987
	車站兇殺案	葉德芬	北星光出版社	1987
	奪命夜快年	葉德芬	北星光出版社	1987

	蜜月列車殺人事件	林達中	臺北林白出版社	1987
	殺人雙曲線	林達中	臺北林白出版社	1988
	陷阱	楊波, 盧麗	瀋陽出版社	1988
	總理大臣被劫記	文珍玉, 葛炎	廣州文化出版社	1988. 1
	約會中的陰謀	尤之	南寧廣西人民出版社	1988. 1
	星期五的魔鬼	木石	瀋陽出版社	1988. 11
	東京車站謀殺案	賈文心	北京華夏出版社	1988. 12
	全線戒備	朱玉等	長沙湖南人民出版社	1988. 3
	幽魂	李云云	成都四川文藝出版社	1988. 6
	恐怖的星期五	錢魏	北京華藝出版社	1989
	忘了唱歌的金絲雀	林達中	臺北志文出版社	1989
	夜幕下的惡魔	石人	海口海南人民出版社	1989
	高原鐵路殺人事件	林達中	臺北志文出版社	1989
	高爾夫殺人事件	林達中	臺北林白出版社	1990
	神探十津川	耀華	西安陝西人民出版社	1990. 2
	使目擊者消失	戴嘉怡	臺北萬象圖書公司	1991
	死亡旅行	郝玉珍等	北京群眾出版社	1991. 2
	魔海幽靈船	李世光	北京群眾出版社	1991. 2
	天使之謎	楊國華, 黃來順	北京群眾出版社	1992

	情斷死亡鏈	楊軍 (逸博)	北京群眾出版社	1992
	“神秘號”列車失蹤之謎	楊軍 (逸博)	北京群眾出版社	1992
	血的代價	張蘇亞	北京群眾出版社	1992
	荒誕大劫持	張蘇亞	北京群眾出版社	1992. 8
	瘋狂之戀	祖秉和	北京群眾出版社	1992. 8
	最上川殺人事件	林達中	臺北林白出版社	1995
	恐怖的夜晚	林達中	臺北萬象圖書公司	1995
	夜間飛行殺人事件	林達中	臺北林白出版社	1995
	危險的裸體	林達中	臺北萬象圖書公司	1995
	七個證人	黃鈞浩	臺北林白出版社	1995
	開往巴黎的殺人列車	張麗穎等	北京群眾出版社	1998
	夜行列車殺人事件	楊軍	北京群眾出版社	1999
	終點站殺人案	徐憲成	北京群眾出版社	1999
	特快臥鋪列車殺人案	祖秉和	北京群眾出版社	1999
	列車 23 點 25 分到笕峴	祖秉和	北京群眾出版社	1999
	消失的油輪	包容	北京群眾出版社	1999
	恐怖橋	楊軍, 李重民	北京中國國際廣播出版 社	2000

	凌晨三點鐘的罪惡	龔志明, 張林聰	珠海出版社	2000
	世家迷霧	龔志明	珠海出版社	2000
	消滅目擊者	楊軍	北京中國國際廣播出版 社	2000
	天使的傷痕	林立秋	貴陽貴州人民出版社	2000
	天使的傷痕	許錫慶	長春時代文藝出版社	2001
	愛的證明	張昶等	珠海出版社	2002
	非命旅程	李重民	珠海出版社	2002
	“舞女號” 列車上的凶案	張昶等	珠海出版社	2002
	扭曲的人	張俊偉等	珠海出版社	2002
高木彬光	檢察官霧島三郎	施元輝	法律出版社	1985. 9
	破戒審判：日本十大推理 名著全集. 3	陳嘉勳	希代書版公司	1987
	陰謀發生在新婚之夜	施元輝, 孟慧姪	中國文聯出版公司	1987. 10
	女富翁的遺產	施元輝	中國文聯出版公司	1987. 3
	紋身殺人事件	陳義	星光出版社	1988
	死者的來信	趙博源	華嶽文藝出版社	1988. 2
	鬼面謀殺案	向陵, 柏葉	北京群眾出版社	1992. 8

	復仇	曲建文, 陳樺	中國文聯出版公司	1992. 8
高野和明	13 級臺階	吳曉玲	山東文藝出版社	2003
高村薰	“女王”行動	孟海霞	譯林出版社	2001
田中光二	逃亡	陳浩	中國文聯出版公司	1986
陳舜臣	北京悠悠館	關燕軍, 王執芳	廣東人民出版社	1985
	粉紅色的陷井	蔡靜等	國際文化出版公司	1988. 12
	虹之舞臺	蕭志強	遠流出版事業公司	1996
	柊之館	汪平	遠流出版事業公司	1996
	失去的背景	張玲玲	遠流出版事業公司	1996
	青玉獅子香爐	姚巧梅	遠流出版事業公司	1997
	孔雀之道	張玲玲	遠流出版事業公司	1997
天童荒太	永遠是孩子： 日本超感犯罪心理小說	趙建勳	群衆出版社	2004
天藤真	嫌疑犯： 日本推理名著大展. 3	林文玲	希代書版公司	1987
戶川昌子	幻影之城： 日本推理名著大展. 1	侯貴娥	希代書版公司	1987
伴野朗	50 萬年的死角 “北京人”奇案追蹤記	丹東	世界知識出版社	1984

	蔣介石的黃金	侯仁鋒	華嶽文藝出版社	1988
	上海間諜戰	金中	江蘇古籍出版社	1990
東野圭吾	畢業前殺人遊戲	傅君	臺北皇冠出版社	1989
	放學後	林敏生	臺北林白出版社	1991
	偵探伽利略	張麗	商周出版	2004
	惡意		臺北商周出版	2004
檜山良昭	中美大決戰		大展出版社	
	暗殺史達林的計劃	童心	新華出版社	1980
	希特勒的陰謀	王泰平	工人出版社	1985
福井晴敏	代號 12	宋再新	山東文藝出版社	2000
藤村正太	大都孤影	周進堂	河南人民出版社	1982
藤原伊織	恐怖分子的陽傘	林敏生	林白出版社	1996
	恐怖分子的陽傘	吳曉玲	山東文藝出版社	2002
星新一	異想天開	張合富	三民書局	
	保您滿意	孟慶樞， 潘力本 主編	江蘇科學技術出版社	1982
	一分鐘小說選		春風文藝出版社	1983
	一分鐘小說選	陳真等	春風文藝出版社	1983
	星新一微型小說選	李有寬	湖南人民出版社	1984
	波子小姐	黃元煥	北嶽文藝出版社	1985

	不速之客	李有寬	湖南人民出版社	1985
	一分鐘小說選		春風文藝出版社	1985
	職業刺客	申英民	百花文藝出版社	1986
	星新一微型小說選	陳劍彤	北京航空學院出版社	1986
	一段浪漫史	李有寬	長江文藝出版社	1986
	稻草娃娃	薛毓華	允晨文化實業公司	1987
	撒旦的遊戲	林達中	林白出版社	1988
	盜賊會社	李朝熙	鴻儒堂出版社	1988
	無影跟蹤	劉踪峰	群益堂	1988. 12
	有人叩門	李照熙		1990
	強盜的苦惱	周萌選編	敦煌文藝出版社	1991. 5
	魔幻星	孫建和, 莊志霞	中國國際廣播出版社	1993
	肩膀上的秘書	郭富光, 于雷	春風文藝出版社	1999
	可親的惡魔	郭富光, 于雷	春風文藝出版社	1999
	可親的惡魔	郭軍和	印刷工業出版社	2001
	星新一短篇小說集	崔昆	譯林出版社	2004
	最後的地球人	李雀美	幼獅文化事業股份 有限公司	2004

松本清張	日本的黒霧 [日本の黒い霧]	文潔若	作家出版社	1965
	日本改造法案 北一輝之死二幕七場話劇 [日本改造法案・ 北一輝の死]	吉林師大 日本研究 室文學組	人民出版社	1975
	點與線 [点と線]		群衆出版社	1979
	森林之花 [花実のない森]	朱佩蘭	台湾林白出版社	1980
	日本推理小説選	吳樹文, 文樸	群衆出版社	1980
	阿姆斯特丹運河謀殺案 [アムステルダム運河殺人 事件]	白沙	台湾林白出版社	1980
	日本的黒霧 [日本の黒い霧]	文潔若	外國文學出版社	1980
	聲音之謎 [声]	郭來舜, 戴璨之	甘肅人民出版社	1981
	内海渡輪 [内海の輪]	林清文	台湾林白出版社	1981

	夜的聲(短編小說集) [夜の聲]	押川雄孝 編	北京出版社	1981
	疑惑 [疑惑]	朱佩蘭	香港有成圖書貿易公司	1982
	波浪上的塔 [波の塔]	趙德遠	江蘇人民出版社	1982
	焦點	邱素臻	台灣林白出版社	1983
	日本的黑霧 [日本の黒い霧]	文潔若	福建人民出版社	1983
	單身女子公寓	朱佩蘭	台灣林白出版社	1984
	奇特的被告 [奇妙な被告]	白生	伊犁人民出版社	1984
	真與假 [真贋の森]	吳元坎	山西人民出版社	1984
	山之峽 [山峽の章]	林清文	台灣林白出版社	1984
	砂之器 [砂の器]	鄭建元	台灣星光出版社	1984
	高中生殺人事件 [高校殺人事件]	朱佩蘭	台灣林白出版社	1984

	天才女畫家 [天才画の女]	朱佩蘭	台湾林白出版社	1985
	影之車 [影の車]	梁惠珠	台湾星光出版社	1985
	蕭瑟樹海 [黒い樹海]	朱佩蘭	台湾林白出版社	1985
	砂器 [砂の器]	曹修林	春風文藝出版社	1985
	點與線 [点と線]	晏洲	天地圖書公司	1985
	點與線 [点と線]	吳春和	台湾林白出版社	1985
	單身女子公寓	朱佩蘭	中國友誼出版公司	1985
	霧之旗 [霧の旗]	王智新	鷺江出版社	1985
	歪斜的複印 稅務署慘案 [歪んだ複写・稅務署殺人事 件]	金中	山東文藝出版社	1985
	沙漠之死 [砂漠の塩]	黃菊	台湾林白出版社	1985

	玫瑰旅遊團 [黒の回廊]	田力	花城出版社	1986
	湖底的光芒 [湖底的光芒]	劉華亭	台灣星光出版社	1986
	人間水域 [人間水域]	王際周, 葛雲華	河南人民出版社	1986
	麗都孽海	張煥文	長江文藝出版社	1986
	半生記 日本當代著名作家 松本清張自傳 [半生の記]	宋麗紅, 王晨	安徽人民出版社	1986
	女囚 [距離の女囚]	葉石濤	台灣晨星出版社	1986
	天城山奇案 [天城越え]	鄭建元	台灣星光出版社	1986
	湖畔陰影 [影の地帯]	曹大峰, 金中	山東文藝出版社	1986
	紅顏薄命	葉石濤	台灣林白出版社	1986
	女作家的秘密	林敏生	台灣林白出版社	1987
	宦海沈冤	餘傑超	台灣志文出版社	1987
	紅簽	葉石濤等	台灣志文出版社	1987
	詐婚	葉石濤等	台灣志文出版社	1987

	日本的黒霧 [日本の黒い霧]	徐沛東	台湾志文出版社	1987
	砂之器 [砂の器]	徐沛東	台湾志文出版社	1987
	魂斷山崖 [山峽の章]	朱佩蘭	台湾林白出版社	1987
	少女復仇記 [霧の旗]	李紅	台湾志文出版社	1987
	迷離世界 [迷走地図]	景河, 高立	時事出版社	1987
	寶藏疑雲 [考える葉]	譚必嘉	台湾志文出版社	1987
	女人的代價 [塗られた本]	柯森耀	吉林人民出版社	1987
	復仇女 [霧の旗]	呂立人	台湾寶文堂書店	1987
	深層海流 [深層海流]	文潔若, 文學樸	國際文化出版公司	1987
	酒吧世界 [黒革の手帖]	馬述禎	百花文藝出版社	1987

	重重迷霧	謝志強, 張素娟	黃河文藝出版社	1987
	迷走地圖 [迷走地図]	劉華亭	台灣星光出版社	1987
	孤狼	宋金玉	法律出版社	1987
	異變街道 [異変街道]	葉淑珍	台灣星光出版社	1987
	愛之夜(短編小說集)	李汶聯	臺灣允晨文化實業公司	1987
	時間的習俗 [時間の習俗]	遊繡月	台灣代書版公司	1987
	惡棍 [わるいやつら]	蔡院森, 張志剛	山東友誼書社	1988
	女性階梯 [夜光の階段]	朱書民	安徽文藝出版社	1988
	日本短篇推理精選	廖為智等	台灣志文出版社	1988
	換妻(短編小說集)		陝西人民出版社	1988
	黃色風土 [黄色い風土]	張杏如	台灣林白出版社	1988
	伴伴兒女郎 [ゼロの焦点]	鄧青, 南敬銘	內蒙古人民出版社	1988

	彩霧 [彩霧]	朱佩蘭	台灣林白出版社	1988
	野性的戀情(短編小說集)	趙德遠 選編	黃河文藝出版社	1988
	隱秘的黑手	徐世虹	四川文藝出版社	1988
	天城山奇案 [天城越え]	鄭建元	四川省社會科學院出版 社	1988
	血案·高速公路 [十万分の一の偶然]	龔宗明, 鄒崇俠	江蘇人民出版社	1988
	情錯 [山峽の章]	金中	春風文藝出版社	1989
	殺人機器的控訴	鍾肇政	台灣志文出版社	1989
	日本短篇推理精選. 九	廖為智等	台灣志文出版社	1989
	私奔 [山峽の章]	張榮等	華嶽文藝出版社	1989
	日本短篇推理精選. 八	廖為智等	台灣志文出版社	1989
	白衣魔影 [喪失の儀礼]	南敬銘, 鄧青	中國文獻出版公司	1989
	日本短篇推理精選. 七	廖為智等	台灣志文出版社	1989
	女名流罪行始末 [ゼロの焦点]	林少華, 沈現	哈爾濱出版社	1989

	夜總會的女招待 [幻華]	管黔秋	黃河文藝出版社	1989
	日本箱屍案 [影の地帯]	康明桂, 石磅	北嶽文藝出版社	1990
	群魔 [わるいやつら]	金中	湖南文藝出版社	1990
	熱之絹 [熱い絹]	林敏生	台灣林白出版社	1990
	青春的彷徨 [青春の彷徨]	鍾肇政	台灣志文出版社	1991
	賣馬的女人 [馬を売る女]	鍾肇政	台灣志文出版社	1991
	零的焦點 [ゼロの焦点]	劉慶綸	中國青年出版社	1991
	淡妝的男人(短編小說集)	槐之	文化藝術出版社	1991
	湖底的光芒 [湖底の光芒]	龔志明	譯林出版社	1992
	點與線 [点と線]	夢夢改寫	中國社會出版社	1998
	砂器 [砂の器]	孫明德等	群眾出版社	1998

	隔牆有眼 [眼の壁]	金中, 章吾一	群眾出版社	1999
	零的焦點 [ゼロの焦点]	金中, 章吾一	群眾出版社	1999
	日本優秀偵探小說叢書, 社 會推理		珠海出版社	2000
	女人階梯 [夜光の階段]	朱書民	珠海出版社	2000
	被玷污的書 [塗られた本]	朱書民, 劉輝	珠海出版社	2000
	星期五之夜(短編小說集)	季葉選編	珠海出版社	2001, 2004 重印
	憂鬱的幸福(短編小說集)	趙博源等	珠海出版社	2001
	黑血的女(短編小說集) [黒い血の女]	李重民 主編	珠海出版社	2001
	日本驚險推理小說集	李重民等	珠海出版社	2002
	彩色的河流 [彩り河]	葉榮鼎	重慶出版社	2002
	點與線 [点と線]		中國社會出版社	2003
	琥珀煙斗(短編小說集)	季葉選編	珠海出版社	2004

	黑色的天空 [黒い空]	侯爲	北嶽文藝出版社	2005
	離婚的條件	侯爲	北嶽文藝出版社	2005
	鴿子(短編小說集)	季葉選編	珠海出版社	2000, 2004 重印
	黑色福音 [黒い福音]	葉榮鼎	四川文藝出版社	2005
水上勉	石子之謎	周進堂	群衆出版社	1981
	海的牙齒	李翟	海洋出版社	1984
	五號街夕霧樓	何平, 喬正	海峽文藝出版社	1985
	雁寺	何平, 一凡	海峽文藝出版社	1985
	毒海怒濤	陸仁	臺北志文出版社	1987
	霧與影	邱德福	臺北志文出版社	1987
	五號街夕霧樓	吳浩正	臺北志文出版社	1988
	海峽屍案	柯森耀	華嶽文藝出版社	1989. 11
	男色	石榴紅文 字工作坊	臺北久大文化公司	1990
	棒棒女郎	于長江	北京出版社	1990
	人生架橋	張利	浙江文藝出版社	1991. 1
	大海獠牙	李長聲	北京群衆出版社	1999

水上勉、 森村誠一	漩渦中的人	韓貞全	山東文藝出版社	1992. 4
皆川博子	虹的悲劇	海曉	群眾出版社	1991. 4
森村誠一	人性的證明	王智新	江蘇人民出版社	1979
	太陽黑點	劉伯青, 李成宰	吉林人民出版社	1980
	人的證明	陳篤忱	中國電影出版社	1981
	野性的證明	朱金和, 孫猛	江蘇人民出版社	1981
	花的屍骸	朱金和	雲南人民出版社	1981
	野性的證明	何培忠	群眾出版社	1981
	食人魔窟 日本關東軍細菌 戰部隊的恐怖內幕	祖秉和, 唐亞明	群眾出版社	1982
	腐蝕	孫立人, 莽永彬	吉林人民出版社	1982
	大城市	郭富光, 孫好軒	春風文藝出版社	1983
	魔鬼的樂園 關東軍細菌戰 部隊恐怖的真相	關成和, 徐明勳	黑龍江人民出版社	1983
	惡魔的暴行	劉宗和	湖南人民出版社	1983

	惡魔的盛宴	胡浩, 黃綱紀	福建人民出版社	1983
	分水嶺	呂立人	寶文堂書店	1983
	惡魔的飽食 續集	正路	吉林人民出版社	1983
	食人魔窟. 第二部, 日本關東軍細菌戰部隊的戰 後秘史	唐亞明, 李丹	群眾出版社	1983
	魔鬼的樂園 第三部	關成和, 徐明勳	黑龍江人民出版社	1984
	魔鬼的樂園 續篇 : 關東軍細菌戰部隊戰後秘史	關成和, 徐明勳	黑龍江人民出版社	1984
	“薔薇蕾”的凋謝	李林, 蔡靜	時事出版社	1984
	青春的證明	田力	北京十月文藝出版社	1985
	食人魔窟. 第三部	祖秉和, 李丹	群眾出版社	1985
	霧夜奇案 又名, 青春的證明	劉多田	群眾出版社	1985
	人性的證明新編	朱繼征, 楊衛紅	解放軍文藝出版社	1985
	惡魔的飽食	成宰等	吉林人民出版社	1985
	銷魂蝕骨	林達中	林白出版社	1986

	冷血舞臺	高智忠	長江文藝出版社	1986
	青春的證明	劉寧	中國文聯出版社公司	1986
	惡夢的設計者	施元輝	黑龍江出版社	1986
	孽緣	林平	黑龍江出版社	1986
	迷人的山頂	馮朝陽, 王曉民	中國文聯出版公司	1986
	黑色飛機的墜落	呂立人	中國青年出版社	1987
	上班族罪行錄	郭麗花	故鄉出版社有限公司	1987
	虛幻的旅行	王為儒, 肖坤華	四川文藝出版社	1987
	上班賊	郭麗花	故鄉出版社	1987
	死亡株式會社	呂理州, 陳曉南	故鄉出版社	1987
	東京機場謀殺案	廖為智	志文出版社	1987
	情愛的證明	高智忠	長江文藝出版社	1987
	勇探魔穴	王三祝	志文出版社	1987
	新幹線謀殺案	譚必嘉	志文出版社	1987
	謀殺從新婚之夜開始	施元輝	黑龍江人民出版社	1987
	上班奴	傅伯甯	故鄉出版社	1987
	疑案追蹤	柯毅文, 黃風英	軍事譯文出版社	1987

	無情都市	賴明珠	故鄉出版社	1987
	惡夢的設計者	江柳	星光出版社	1987
	魂斷天涯	王三祝	志文出版社	1987
	人性的證明	王三祝	志文出版社	1987
	勇探魔穴	王三祝	志文出版社	1987
	罪惡的黑手	王琳德	黑龍江人民出版社	1988
	上班族缺德講座		遠流出版事業公司	1988
	高層飯店的死角	于榮勝, 許躍明	文化藝術出版社	1988
	復仇幽靈	樊一	四川人民出版社	1988
	掛鎖的棺材 下	陳浩, 瀟予	中國文聯出版社	1988
	死亡鏈條	劉嘉, 李連	四川人民出版社	1988
	陰陽復仇記	施元輝	百花文藝出版社	1988
	掛鎖的棺材 上	陳浩, 瀟予	中國文聯出版社	1988
	槍手的命運	趙曉明	中國婦女出版社	1989
	完全犯罪使者	葉蕙	博益出版集團公司	1990
	狙擊者悲歌	葉蕙	博益出版集團公司	1990
	雪野追殺	徐明中等	花山文藝出版社	1990
	魔鬼的盛宴： 侵華日軍 731 部隊罪證紀 實. 第三部	關成和, 徐明懇	黑龍江人民出版社	1991

	魔鬼的盛宴： 侵華日軍 731 部隊罪證紀 實. 第二部	關成和, 徐明懇	黑龍江人民出版社	1991
	魔鬼的盛宴： 侵華日軍 731 部隊罪證紀 實. 第一部	關成和, 徐明懇	黑龍江人民出版社	1991
	子夜悲歌	高文漢	山東文藝出版社	1991
	豪放的聚會	林達中	萬象圖書公司	1991
	異常的太陽	林達中	萬象圖書公司	1991
	血手印案件	宋金玉	群眾出版社	1991
	凶水疑案	千秋	群眾出版社	1992
	死亡座位	徐魯揚等	譯林出版社	1992
	黑道情仇	顧培軍	群眾出版社	1992
	漩渦中的人	韓貞全	山東文藝出版社	1992
	黑血的證明	祖秉和	群眾出版社	1992
	神賜的宴會	崑桑, 方曉	時代文藝出版社	1992
	兇險人生	曹春生	群眾出版社	1992
	情債血案	要塞等	群眾出版社	1993
	花骸	馬興國	百花洲文藝出版社	1993
	死亡陷阱	黃柏, 吳非	陝西人民出版社	1993
	厚黑新語	哀喚編譯	山西人民出版社	1993

	黑魔女之隱秘	馬述禎	群衆出版社	1994
	上班族缺德講座		遠流出版事業公司	1994
	彩虹夢	文潔若	百花文藝出版社	1995
	私生子	許秉潔	群衆出版社	1995
	終點站	林敏生	林白出版社	1996
	人性的證明	徐京寧等	海南出版社	1998
	青春的證明	丁國楨等	海南出版社	1998
	野性的證明	春華改寫	中國社會出版社	1998
	野性的證明	何培忠等	海南出版社	1998
	殺人的祭壇	王安勤, 魏娜	群衆出版社	1999
	定婚耳環		群衆出版社	1999
	惡魔的圈內	祖秉和	群衆出版社	1999
	雲海魚形獸	杜冰	群衆出版社	1999
	人間的十字架	張毓英, 王路芳	群衆出版社	1999
	殺人株式會社	高凌遠	群衆出版社	1999
	腐蝕的構造	鄭民欽	群衆出版社	1999
	東京空港殺人案	葉榮鼎	群衆出版社	1999
	殺人株式會社	林順隆	小薰書房公司	1999
	致死坐席	葉宗敏	群衆出版社	1999

	殺手的悲歌	向陵, 柏葉	群眾出版社	1999
	惡夢的設計者	施元輝	群眾出版社	1999
	螺旋狀垂訓	王建新	群眾出版社	2000
	空洞星雲	鄭民欽	群眾出版社	2000
	新東方快車謀殺案	王路芳	群眾出版社	2000
	夜之虹	曹春生, 王曉延	群眾出版社	2000
	悽愴圈	祖秉和	群眾出版社	2000
	棟居刑警的憤怒	張錦德	珠海出版社	2000
	車站	葉宗敏	群眾出版社	2000
	神秘的山顛	何乃英	群眾出版社	2000
	致死家庭	孟向榮, 李桂梅	群眾出版社	2000
	完全犯罪使者	杜冰	群眾出版社	2000
	異端者： 人間的十字架 PART2	李重民	群眾出版社	2000
	古怪的臉	李重民 主編	珠海出版社	2001
	電話魔	趙博源等	珠海出版社	2001
	野性的證明	何培忠等	群眾出版社	2002
	青春的證明	徐京寧等	群眾出版社	2002

	青春的叛逆	曾峻梅	雲南人民出版社	2002
	人性的證明	丁國禎等	群眾出版社	2002
	野性的證明	何培忠等	群眾出版社	2003
	青春的證明	徐京寧等	群眾出版社	2003
	惡魔的飽食： 日本細菌戰部隊揭秘	駱為龍， 陳耐軒	學苑社	2003
	野性的證明	春華改編	中國社會出版社	2003
	與你共用黎明的咖啡	帥松生	群眾出版社	2004
	魔窟：日本細菌部隊的可 怕真相	鄭民欽	群眾出版社	2004
	人性的證明 日文版	馬蘭英 注釋	譯林出版社	2004
	告別天使	于之潤， 張孟緋	時代文藝出版社	2005
	太陽黑點	韓小龍	群眾出版社	1999
	高層的死角	李重民	群眾出版社	1999
	危險的旅伴	季葉選編	珠海出版社	2001
	花骸	馬興國	江西人民出版社	1999
山田章博	十二國記： 風之萬里·黎明之空·下	陳惠莉	尖端出版股份有限公司	2004
山田風太郎	魔界轉生	鄭秀美	星光出版社	1985

	道魔大決鬥	樊學鋼	陝西人民出版社	1990
山村美紗	玫瑰色的謀殺案	郭登科 選編	時代文藝出版社	1987
	美豔女探出擊	林文玲	希代書版公司	1987
	要命的訂婚旅行	薛毓華	皇冠出版社	1987
	要命的離婚旅行	薛毓華	皇冠出版社	1987
	要命的再婚旅行	洪碧娟	皇冠出版社	1987
	消失在海峽	葉蕙	博益出版集團公司	1988
	離婚旅行	王珏, 文琰	中國文聯出版公司	1988
	殺人地圖	葉蕙	博益出版集團公司	1988
	燃燒的新娘	林敏生	林白出版社	1988
	無頭屍	葉蕙	博益出版集團公司	1988
	清水阪殺人事件	葉蕙	博益出版集團公司	1989
	蝴蝶痣姑娘	姚文慶	瀋陽出版社	1989
	黑色環狀線	葉蕙	博益出版集團公司	1990
	代理妻殺人案	楊冠東	群衆出版社	1992
	靈柩中的紫藤花	徐斌	軍事譯文出版社	1992
	京都·峇裏島殺人旅行	朱佩蘭	遠流出版事業公司	1993
	消失于麻六甲海峽	楊慧芳	林白出版社	1994
	虛幻的指定席	林敏生	林白出版社	1995
	屍謎	林敏生	林白出版社	1995

	京都化野殺人案	楊軍 (逸博)	群眾出版社	1996
	京都新婚旅行殺人案	楊軍 (逸博)	群眾出版社	1996
	陷阱	章吾一	群眾出版社	2000
	美髮城殺人案	金中	群眾出版社	2000
	仿真珍珠謀殺案	孫明德, 周黎薇	群眾出版社	2000
	新幹線劫持案	張婉茹	中國國際廣播出版社	2000
	黑色環狀線	金中	群眾出版社	2000
	小京都連續殺人事件	李重民	群眾出版社	2000
	平家傳說殺人旅行	李重民	群眾出版社	2000
	意外的兇器	楊軍等	珠海出版社	2002
山本文緒	戀愛中毒	(日)中原 鳴子	上海譯文出版社	2001
	鳳梨飄香的彼岸	張唯誠	上海譯文出版社	2003
唯川惠	情困	(日)中原 鳴子	上海文化出版社	2003
結城昌治	光天化日	侯貴娥	希代書版公司	1987
	黑夜結束時	林敏生	林白出版社	1991
橫溝正史	迷宮之門	王紀卿	湖南人民出版社	1980

	濺血的遺囑	猛子, 念鶴	雲南人民出版社	1982
	八墓村	周炎輝	湖南人民出版社	1986
	女人要比男人多個心眼	李平	長江文藝出版社	1987
	女明星的奇特婚姻	馬強, 石兵	中國婦女出版社	1988
	情仇	謝志強, 張素娟	黃河文藝出版社	1988
	血腥的遺囑	君賢	陝西人民出版社	1988
	神秘夢中人	林敏生	林白出版社	1988
	迷宮之門·芙蓉公館的秘密	王紀卿	湖南人民出版社	1988
	怪獸男爵	鞏長金, 孟瑜	長虹出版公司	1989
	幽靈座	劉殿舉, 王成彥	軍事譯文出版社	1992
	“潘朵拉匣子”的奧秘	張嵐, 杜漸	時代文藝出版社	1992
	本陣殺人事件	林敏生	林白出版社	1993
	化裝舞會·下	陳惠萍	加珈文化事業公司	1998
	化裝舞會·上	陳惠萍	加珈文化事業公司	1998
	惡魔的寵兒	羽一	內蒙古文化出版社	1999
	迷路的新娘	曾穎珊	內蒙古文化出版社	1999
	名琅莊慘案	趙帆	內蒙古文化出版社	1999
	惡魔的彩球歌	卓峰	內蒙古文化出版社	1999

	駝背的詛咒	陳綽欣	內蒙古文化出版社	1999
	神秘女子殺人事件	清心	內蒙古文化出版社	1999
	惡靈島	吳家偉	內蒙古文化出版社	1999
	惡魔吹著笛子來	偉崢	珠海出版社	1999
	鷹巢海角慘案	何碩風	貴州人民出版社	1999
	女王蜂	第五賢德	珠海出版社	1999
	獄門島	趙劍峰	珠海出版社	1999
	八墓村	劉紅	珠海出版社	1999
	金田一探案集		貴州人民出版社	1999
	真珠塔	吳家偉	貴州人民出版社	1999
	青發鬼	任尉	貴州人民出版社	1999
	幽靈男	吳彥明	內蒙古文化出版社	1999
	殺人預告	尹卓倫	內蒙古文化出版社	1999
	百億遺產殺人事件	郭志興	內蒙古文化出版社	1999
	夜光怪人	區正國	內蒙古文化出版社	1999
	化妝舞會	汪洋	內蒙古文化出版社	1999
	惡靈島	吳家偉	內蒙古文化出版社	1999
	神秘女子殺人事件	清心	內蒙古文化出版社	1999
	犬神家族	第五賢德	珠海出版社	2000
	金田一探案續集		珠海出版社	2000
	名琅莊	趙劍峰	珠海出版社	2000

	橫溝正史精品系列		珠海出版社	2000
	迷路的新娘	偉崢	珠海出版社	2000
	來自懸崖的呼叫		珠海出版社	2000
	本陣殺人事件	劉紅	珠海出版社	2000
	金田一探案集		珠海出版社	2002
	惡靈島	劉紅	珠海出版社	2002
	門後的女人	葉特靈	珠海出版社	2002
	金田一探案三集		珠海出版社	2002
	醫院坡血案	第五賢德	珠海出版社	2002
	暗夜裏的黑豹	葉特靈	珠海出版社	2002
	化裝舞會	章吾一	珠海出版社	2003
	美女百唇譜	葉特靈	珠海出版社	2003
	七面人生	蔡荷	珠海出版社	2003
	金田一探案五集		珠海出版社	2003
	惡魔的寵兒	茹順正	珠海出版社	2003
	白與黑	葉特靈	珠海出版社	2003
	罪惡的拍球歌	葉特靈	珠海出版社	2003
	夢遊	葉特靈	珠海出版社	2003
	金田一探案四集		珠海出版社	2003
	女人，要比男人多個心眼	李平	長江文藝出版社	1987, 1994 重印

	八墓村	劉紅	珠海出版社	1999, 2002 重印
	惡魔吹著笛子來	偉崢	珠海出版社	1999, 2002 重印
	女王蜂	第五賢德	珠海出版社	1999, 2002 重印
吉村達也	吉村達也懸念推理小說集	趙博源	珠海出版社	2002
	懸念大師 De 邀請信	趙博源	珠海出版社	2002
	玫瑰 De 謎案	趙博源	珠海出版社	2002
連城三紀彥	一朵桔梗花	鍾肇政	林白出版社	1985
	命運的八分休止符	吳怡娟	希代書版公司	1987
	紅唇	郭麗花	故鄉出版社	1987
	寫給愛人的信	洪碧娟	皇冠出版社	1987
若櫻木虔	環戀	劉峰等	瀋陽出版社	1988
和久峻三	兇手就是她?!	林懷秋	黃河文藝出版社	1989
	偶然防衛	月房子編 譯中心	月房子出版社	1994
	我沒有殺人	劉惠禎	月房子出版社	1994
	沈默的審判	月房子編 譯中心	月房子出版社	1994
	神探大對決	唐凱俐	月房子出版社	1995

	白骨紅顏	月房子編 譯中心	月房子出版社	1995
	永不回頭的復仇者	蘇燕謀	大展出版社	1981
西村寿行	渡過憤怒的河	張柏霞	吉林人民出版社	1982
	涉過憤怒的河	楊哲山, 王曉濱	群眾出版社	1982
	癌病船	王玉琢	北京出版社	1982
	污染的海峽	高曾傑, 郝玉珍	群眾出版社	1984
	不歸的復仇者	羅二虎	昆侖出版社	1987
	血火大地	肖坤華	甘肅人民出版社	1987. 9
	黑色的瘋狂	劉星	湖南文藝出版社	1988
	裸冬	李岩	山東文藝出版社	1988. 10
	迷惘的夢	丁賢鉅, 薛國梁	廣西民族出版社	1988. 2
	不歸的復仇者	羅二虎	昆侖出版社	1988. 3
	女人與狗 = WOMEN AND DOG.	陳浩	華藝出版社	1988. 7
	狂人之國	汜力	廣西民族出版社	1988. 8
	魔牙	王大可	北京台聲出版社	1989. 3
	凌虐	丁國奇	大連出版社	1989. 6

	變態惡魔	林漓	花城出版社	1989. 7
	魔妖山莊	陳凡, 含笑	內蒙古人民出版社	1992. 8
	婦產科的陰影	高楊	內蒙古人民出版社	1992. 8
	復仇的火焰	曉溪等	軍事誼文出版社	1992. 9
	血腥的罪惡	蘆江華	內蒙古人民出版社	1992. 9
	涉過憤怒的河	夏燕改寫	中國社會出版社	1998
	涉過憤怒的河	夏燕改編	中國社會出版社	2003
夏樹靜子	影鎖	薛毓華	允晨文化實業公司	1987
	逝去的影子	詹龍驤	博益出版集團公司	1987
	邊境之女	葉蕙	博益出版集團公司	1987
	M 的悲劇	朱佩蘭	博益出版公司	1987
	失蹤	張淑懿	志文出版社	1987
	試管嬰兒風波	劉慕沙	博益出版公司	1987
	愛與罪	日本文摘 編譯中心	故鄉出版社	1987
	愛的終結	戴璨之, 郭來舜	吉林人民出版社	1987. 12
	午後二時的認聞	林敏生	林白出版社	1988
	隱密的殉情	朱佩蘭	林白出版社	1988
	第三個女人	陳玲芳	旺文社	1988
	虛幻的承諾	葉蕙	博益出版集團公司	1988

	變性者的隱私	劉金鴻, 丁 濤	湖南文藝出版社	1988. 9
	私情	李有寬	湖南文藝出版社	1988. 9
	有人不見了	賴育寧	皇冠出版社	1989
	77 班機事件幕後案	廖如儀	志文出版社	1989
	雲間贈來的死	葉蕙	博益出版集團公司	1989
	女性的悲劇	穆廣菊	華夏出版社	1990. 6
	第三個女人：一部活生生的 “罪與罰”	頑石	南海出版公司	1990. 7
	黑白旅路	黃來順	花城出版社	1995
	黑白的旅途	朱佩蘭	林白出版社	1995
	霧冰	朱佩蘭	不二出版公司	1995
	蒸發	楊軍 (逸博)	群眾出版社	1996
	青春的懸崖	楊軍 (逸博)	群眾出版社	1996
	M 的悲劇 C 的悲劇	黃來順	花城出版社	1997
	目擊	王光民	群眾出版社	1998
	第三個女人	祖秉和	群眾出版社	1998

	喪失	楊軍 (逸博)	群眾出版社	1998
	風之門	樊松萍, 洪成浸	群眾出版社	1998
	來自死亡谷的女人	楊軍 (逸博)	群眾出版社	1998
	M 的悲劇	楊軍	中國國際廣播出版社	2000
	W 的悲劇	楊軍	中國國際廣播出版社	2000
	日本名家推理小說悲劇系列	楊軍	中國國際廣播出版社	2000
	貨運來的女人	楊軍	中國國際廣播出版社	2000
	C 的悲劇	楊軍	中國國際廣播出版社	2000
	致命的三分鐘	楊軍, 李重民	中國國際廣播出版社	2000
	通向絞刑架的電纜車	李重民	珠海出版社	2000
	無可替代的愛	李重民	珠海出版社	2001
佐野洋	別了, 可惡的人!	王紀卿, 夏子	中國文聯出版公司	1986
	透明受胎 : 日本十大推理名著全集. 6	沈曼雯	希代書版公司	1987
	人類生旦時	廖如儀	志文出版社	1988
	弄假成真的姻緣	劉多田	中國文聯出版公司	1988. 11

	日本推理小說傑作精選. 19	林敏生	林白出版社	1991
	華麗的醜聞	林敏生	林白出版社	1992
	紅色的君影草	張紅等	珠海出版社	2000
	佐野洋懸念推理小說集	章吾一	珠海出版社	2002
	過於年輕的臉龐	章吾一	珠海出版社	2002
	變色的時間	章吾一	珠海出版社	2002
	一模一樣的女人	季葉	珠海出版社	2004
仁木悦子	貓知道	金岡	群衆出版社	1980
	林中小屋	朱佩蘭	民主報社	1984
	黑色緞帶	葉石濤	博益出版集團公司	1987
	林中之家： 日本十大推理名著全集. 6	曾美莉	希代書版公司	1987
	有刺的樹	林敏生	林白出版社	1988
	黃色的誘惑	葉石濤	林白出版社	1988
	黑貓知情	朱佩蘭	博益出版集團公司	1988
	冰冷的街道	林敏生	林白出版社	1994
北方謙三	欲望街頭	林敏生	林白出版社	1991
	鳥影	王雲蕾, 徐憲成	群衆出版社	2000

	默約	宋金玉, 張吉生	群衆出版社	2000
	再見吧！荒野	王丕迅, 興安	群衆出版社	2000
	秋霜	楊軍	群衆出版社	2000
	殘照	楊軍	群衆出版社	2000
	碑銘	楊軍	群衆出版社	2000
宮部みゆき	模仿犯. 上			
	模仿犯. 下			
	模仿犯. 第一部	胡燕, 韋和平, 喬君	中國友誼出版公司	2004
	魔術的耳語		商周出版	2004
	獵捕史奈克	劉子倩	商周出版	2005
	理由	喬君	中國友誼出版公司	2005
內田康夫	橫濱殺人事件		天地	
	牛頓科學研習百科. 6, 動物	丁錫鏞	牛頓出版社	1985
	內田康夫推理小說系列		天地圖書有限公司	1998
	內田康夫推理小說系列		天地圖書有限公司	1998~

	第五個死者	黎靜, 陳多友	天地圖書有限公司	1998
	天河傳說殺人事件	葉榮鼎	群眾出版社	2000
	戶隱傳說殺人事件	李重民	群眾出版社	2000
	亡靈殺迷案	鄒波, 楊文瑜	珠海出版社	2000
	琵琶湖哀歌殺人事件	丁國旗	天地圖書有限公司	2000
	盲琴師	陳多友	天地圖書有限公司	2000
	淺見光彥探案傑作系列叢書		四川文藝出版社	2002~
	死亡綠皮書	張亦依	四川文藝出版社	2002
	貴賓室的怪客	楊爽, 姚繼中	四川文藝出版社	2002
	哭泣的遺骨	王蜀豫, 李旭	四川文藝出版社	2002
	盆景	曹宇	珠海出版社	2003
	花兒無價	鄧青, 閻德學	珠海出版社	2003
	海市蜃樓	蔡霞, 黃曉燕	珠海出版社	2003
	沈睡的記憶	崔嵐, 王志新	珠海出版社	2003

	藍色長廊之謎	顧龍保	珠海出版社	2003
大藪春彦	我不需要墳墓	曹育才, 劉幼林	甘肅人民出版社	1988.5

注：この目録は中国国家図書館、上海図書館、天津図書館、北京大学図書館、清華大学図書館、北京師範大学図書館などの「蔵書目録」をベースにして作成したものである。日本の書名との対応も企画したが、日本の文献が不足しているので、今後の課題にする次第である。

平成十八年一月三十一日発行

第六回松本清張研究奨励事業研究報告書

編集・発行 北九州市立松本清張記念館

北九州市小倉北区内二番三号

電話 ○九三―五八二―二七六一

印刷・製本 (株)ゼンリンプリントックス

松本清張研究奨励事業

第8回

募 集 要 項

- 一、趣 旨
時代を見つめ続けた松本清張の文学を研究することは、今後の時代の進むべき方向性と私たちの生きていく指針を見出すことにもつながります。このような視点から、清張の作品や人物像についての研究活動を推進し、歴史や社会の事象の深層を追求する精神を継承していくため、松本清張夫人ナヲ様のご厚意により創設しました。
- 二、対 象
ジャンルを問わず、松本清張の作品や人物像を研究する活動や、松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動（調査、研究等）で、これから行おうとするもの。年齢、性別、国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。
- 三、内 容
入選者（団体）に二〇〇万円を上限とする研究奨励金を支給します。金額は企画内容を検討して決定します。
- 四、応募規定
今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料など（様式は自由、ただし日本語）を、平成十八年三月三十一日までに応募してください。
- 五、選 考
松本清張記念館内の選考委員会により選考します。
- 六、発 表
審査終了後、審査結果を直接通知します（六月末頃）。なお、入選者には開館記念日（八月四日）に、北九州市で贈呈式を行います。
- 七、その他
採用された企画は翌年の六月末日までに実施成果を報告していただきます。また、成果品である研究論文、報告書等は記念館が刊行予定の研究誌に掲載することがあります。成果品にかかる著作権等諸権利は、北九州市に帰属します。
- 八、応募先
〒八〇三〇八二二 北九州市小倉北区内二番三号
TEL〇九三（五八二）二七六一 FAX〇九三（五六二）二三〇三

北九州市立 松本清張記念館